

# L.G. ゴスリツキ “De Optimo Senatore” 論

—— 人権思想への影響との関連において ——

遠 藤 安 彦

- 一. はじめに
- 二. 中世ポーランドの国情「君主主義から共和主義へ」
- 三. ゴスリツキ De Optimo Senatore 論における基本思想
- 四. ゴスリツキ思想における基本的人権と自由の保障
- 五. おわりに

## 一. はじめに

一五世紀から一七世紀にかけてのルネッサン期はヨーロッパに多くの優れた人材を輩出し、それは今日にも大きな影響を及ぼしているのは周知のところである。ルネッサンス期は人類の精神文化を高揚させ開花させる時代であった。ルネッサンス期の代表的人物には、その一部を挙げるとすれば、イタリアには「神曲」を著したダンテ（1265-1321）、芸術家であり技術者であり科学者でもあるレオナルド＝ダ＝ヴィンチ（1452-1519）、建築家にして画家のミケランジェロ（1475-1564）、人文主義精神に貫かれる「デカメロン」を著したボッティチェリ（1445-1510）、政治思想家で「君主論」のマッキアヴェリ（1462-1527）、物理学者にして天文学者のガリレオ＝ガリレイ（1564-1642）などがある。オランダには、カトリック教会内部にあってその墮落を批判するなどあらゆる権威を風刺する「愚神礼讃」をあらわしそれを宗教改革前夜にヨーロッパ中にひろめたエラスムス（1466-1536）がいる。彼のとく人文主義 humanism はヨーロッパに大きな影響

を及ぼした。ドイツにも神学者にして人文主義とプロテスタンティズムを調和させようとしたメランヒトン（1497-1560）、人文主義者のロイヒリン（1455-1522）がおり、フランスにはエラスムスと親交のあった人文主義者で思想家のモンテーニュ（1533-92）、ラブレール（1494-1553）がいる。イギリスにはエラスムスと親交を結ぶ人文主義者であり、「ユートピア」を著し、晩年には大法官を務めたトマス・モア（1478-1535）、多くの劇作をかいたシェークスピア（1564-1616）がいる。スペインには風刺小説「ドン・キホーテ」の著者セルバンテス（1547-1616）がいる。また羅針盤や印刷機が発明されたのもこの頃である。グーテンベルクの発明する活版印刷術（1450年頃）によりルネサンスの新しい思想は瞬く間に流布したのであり、こうしてルネッサンスは中世の暗黒時代の束縛から人間精神を解放した輝かしい時代であったと評価されるのである。

他方、ポーランドについては通説の天動説に対して地動説をとねえたコペルニクス（1473-1543）を除いて殆んど知られていないのが現状である。然るべき評価がなされるならば影響力があると考えられる知識人の存在は案外知られていない。社会科学系からそれらに該当する人物をあげるならば、ルネッサンスの影響をかなり早くに受けて14世紀中期創設のクラクフ大学の学長（1400-1413）をつとめ教会法を教授し「正戦論」（De bellis justis）を説いたスタニスワフ（Stanisław）と、続いて同学長を務め内外で宗教的寛容を説いていたヴォトコヴィッツ（Włodkowiec）を挙げなければならない。スタニスワフは宗教的寛容の理論を説きキリスト教徒と異教徒の平等を一貫して主張しており、後に大学が人文主義（humanism）でヨーロッパ中に名声を博する基礎となっている。彼らは宗教的寛容の概念を実際の理由から国内外で現実に展開することをめざし、コンスタンツ公会議（1414-18）において宗教的寛容と自由思想を披瀝する。エラスムスの影響をうけた人文主義者として人間の普遍的自由と平等の概念を提唱す

る政治思想家モジェフスキ (A. F. Modrzewski. 1503-72) は重鎮である。彼はスタニスワフの理論を現実に展開する。彼等は自然法の父と仰がれるグロチウス (Grotius. 1583-1645) より二世紀も前に活躍した宗教家であるが、前者二人は正当なる原因のない戦争の反対、いわゆる正戦論を説いていたのである。後者は万人に正義が行われることを主張するのであり、彼らのグロチウスに対する影響は明らかである<sup>(1)</sup>。また主権概念はボーダン (Bodin. 1530-96) が確立したと言われるが、実はさらに一世紀早くオストログ (Jan Ostroróg: 1436-1501) が発表しているのである<sup>(2)</sup>。

- 
- (1) スタニスワフ (Stanisław of Scarbimiria) は15世紀初めに正戦論 (*De bellis justis*) を説き、正当性のない戦争は禁止されるべきとする。これには私闘は含まれないとするその考えは、200年後にグロチウス (Hugo Grotius, 1583-1645) が話す内容と同じである。クラクフ大学学長を務めるヴウォトコヴィッツ (Włodkowic; Vladimiri) はさらに国内外での宗教的寛容を説いている。のちに彼はコンスタンツ公会議 (1414-18) でポーランド代表を務める。Wenceslas J. Wagner, *Justice for All: Polish Democracy in the Renaissance Period in Historical Perspective*, in S Fiszman (ed.), *The Renaissance in its European Context*, p. 133. モジェフスキ (Modrzewski) は身分・階級を超越して万人すべての市民間における普遍的な自由と平等の概念を提唱する。国家間における関係も同様と考える。モジェフスキには1543年の二つの論文、階級間の区別にもとづくポーランド刑法を告発する論文 (*Lascius sive de poena homicidii*) とポーランド一般市民の政治的権利を擁護する論文 (*Oratio Philaetis Peripetici*) がある。また1551年刊行の *Commentariorum de Republica emendanda libri quinque* は、慣習、法律、戦争の仕方、教育の改革を通して総合的には教会改革を主張する。同書はスペイン、独、英、ロシア各国語版がだされ、一躍ヨーロッパで有名になる。後にグロチウスは *Via Ad Pacem Ecclesiasticam* (1642) において同書を引用しながらモジェフスキと同じ主張をしている。Waldemar Voisé, *Polish Renaissance Political Theory: Andrzej Frycz Modrzewski*, in Samuel Fiszman (ed.), *op. cit.*, p. 174. スタニスワフとモジェフスキの思想がグロチウスに引き継がれているのを考えると、かれらはグロチウスの思想上の師匠筋にあたることになろう。
- (2) Wacław Szyszkowski, *The Law of Nations in Poland from the Middle Ages to Modern Times*, in W J Wagner (ed.), *Polish Law Throughout the Ages*, p. 69.

そうした中に列挙されるべき識者の一人と考えられるのが、宗教家、思想家ゴスリツキ（羅語名：Laurentius Grimaldus Goslisciusi, ポーランド語名：Wawrzyniec Grzymala Goślicki：1530-1607）である<sup>(3)</sup>。かれがクラフク大学卒業後留学したイタリアで1568年刊行したラテン語版“De Optimo Senatore”は、その内容がヨーロッパ全体に共通する普遍性にとむ問題を扱かうものであったため、彼の名は一躍ヨーロッパ中に広がることになる<sup>(4)</sup>。著書“De Optimo Senatore”はザモイスキ（Jan Zamoysky, 15042-1605）の“De Perfecto Senatore”（1564）の影響を多分にうけている<sup>(5)</sup>。著書“De Optimo Senatore”の名声は、英訳版がピューリタン革命より1世紀前の1568年に出版されて流布していたこともあってヨーロッパの中でもとくにイギリスにおいて高い<sup>(6)</sup>。同書で扱われるのは、自由、正

---

(3) ポーランド・ルネッサンスに顕著な貢献をして後世に影響をあたえた人物として N. デイビスは、科学者コペルニクス、宗教指導者であり宰相を務めたザモイスキ、ポーランド国民文学の創始者コチャノウスキ、最初のポーランド語文法の作成者ザボロウスキ、最初のポーランド地図作成者ワボウスキなどと並んでゴスリツキをも挙げる。Norman Daves, *God's Playground — A History of Poland* —, revised ed., Columbia Univ. Press, 2005, vol.1. p. 119.

(4) ゴスリツキの1568年の著書, Grimalii Goslicii, DE OPTIMO SENATORE, Venetiis, 1568 は、書名、著者名ともラテン語で書かれ2巻分冊で刊行されるが、1593年に Basel でも刊行される。脚注(6)をも参照。

(5) 後に宰相を経験するザモイスキは、イギリスのバーレー卿、エリザベス女王の政治顧問ウオレインハム等とともに20世紀初頭の国際連盟に類似するヨーロッパ国際会議を構想していた。ゴスリツキはこの壮大な政治家ザモイスキの影響を受けている。W. J. Stankiewicz, *The Accomplished Senatore of Laurentius Goslicius*, Oficyna Warszawska Abroad, 1946, p. 14.

(6) ラテン語版 De Optimo Senatore, Venice が1568年に出てから30年後、ロンドンで英語版が1598年に“The Counsellor, Exactly Pourtraited in Two Books, Wherein the Office of Magistrates, the Happiness Life of Subjects, and the Felicitie of Common-weales is pleasantly and Pithilie Discoursed, A Golden Worke, Replenished with the chiefe learning of the most excellent Philosophers and Lawgiuers, and not



義、政治論、人民の幸福、権力の行使と制限など多岐にわたるが、基調となるのは共和主義思想の下での人民の幸福である。同様の内容の書は以前にも扱われたことがあるが、それらの殆どは権力者への追従と抑制的表現で終始するのに対し、ゴスリツキにはそれが見当たらないのである。訳者の表現をかりると、彼は婉曲的で微妙な表現をしながらも、臆することなく問題を批判的に展開するのである<sup>(7)</sup>。しかもその内容は普遍的な事象を扱うがゆえに評判を呼んだのであり、またことの本質に迫るがゆえ古典の

---

only profitable, but verie neccesarie for allthose that be admitted to the administration of a well-gouerned Common-weale, Written in Latin by Laurentius Grimaldus, and Consecrated to the honour of the Polonian Empire, Newlie translated into English.”という仰々しいタイトルのもとで、次は1607年に”A Commonwealth of Good consaile”として刊行された。しかし両書は書名を変えただけで内容は殆んど同じとされ、翻訳も正確ではないと指摘される。例えば、1598年版は自由 (liberty) の意味を僅かに変えてエリザベス女王に好都合に偏向されており自由思想を受けいれてはいない。W. J. Stankiewicz, *The Accomplished Senator of Laurentius Goslicius*, Oficina Warszawska Abroad, 1946, p. 11-12. しかし初期の英訳版は、原典のラテン語版 (1598) を随所で部分的に削除したり翻訳が為政者に都合の良いようにされているのが発見されている。Teresa Bałuk-Ulewiczowa, *The Senator of Wawrzyniec Goslicki and The Elizabethan Counsellor*, in S. Fizman (ed.), *The Polish Renaissance in its European Context*, Indiana Univ. Press, 1988, p. 259 at 271-3.

その130年後、有能な翻訳者オルディズワースをえて1733年に、Laurence Grimald Gozlski, *The Accomplished Senator, Done into English, From the Edition printed at Venice, in 1568, By Mr. Oldisworth*, London, in 1733. が刊行された。さらに2世紀半後、書名は同じだが著書名をラテン語名からポーランド語名に変えて復刻されたのが、Wawrzyniec Grzymala Goslski, *The Accomplished Senator*, new introduction by Prof. Kenneth Thompson, *The American Institute of Polish Culture*, Miami, 1992 である。今回筆者が使用するのは、1992年アメリカで出版された、1733年英版 “the Accomplished Senator”, 翻訳オルズワース W. Oldisworth, の復刻版である。

(7) Oldisworth's Dedication. Goslicki, *De Optimo Senatore*, (Oldisworth's edition), 1992.

部類に該当すると評されるのである<sup>(8)</sup>。ゴスリツキがヨーロッパで大きな足跡を残している証拠は、当時のイギリスの神学者、哲学者ジョン・ディー（John Dee）が、ルネッサンス期に活躍した人間の一人に彼を挙げている<sup>(9)</sup> ことから窺い知ることができる。イギリスでの名声は百年以上に亘るが、イギリスでの支持が衰えなかったのはこの国に彼を必要とする状況があったということである。たとえば17世紀のピューリタン革命（1638-60）に国王側と対決する反王党派はゴスリツキの言葉から精神的な滋養を得ながら、至る所でゴスリツキの主張を引用して貼り付けて運動を鼓舞していたのである<sup>(10)</sup>。君主主義に反対し共和主義を掲げる思想家も滋養をえていたかもしれない。そうであるとなると、その影響は看過できないほどに大きい筈である。イギリスに影響があるとすれば以後の政治思想

---

(8) Ibid., Oldisworth's Dedication & Introduction by Prof. K. W. Thompson.

(9) ルネッサンス期イギリスのジョン・ディー（1527-1608）は、哲学者であり数学者であり占星術師であり且つまた神学者でもあった。かれの膨大な収集資料は英国にて“Renaissance Man: The Reconstructed Literatures of European Scholars, 1450-1770, Series One: The Books and Manuscripts of John Dee, 1527-1608”として Adam Matthew Publications から刊行されているが、その第6部の中に、賢者44名の中にラテン語名でゴスリツキの名前があることから知れる。20世紀に入りディーの書物の影響の大きさが評価されている。ジョンソンは、「この偉大な図書はディーの仲間内、学生の間ではいつも利用できていた。大学で最も基本的で中心的なものが図書であると考えるならば、ディーの周辺こそ1560年から1583年にかけてイングランドの科学的な大学と呼べるところである。」 F.R. Johnson, *Astronomical Thought in Renaissance England*, Baltimore, 1937, p. 139.

(10) 絶対君主と王権神授説を否定するゴスリツキがエリザベス女王や初期スチュアート朝の国王に歓迎されるはずがなく、特にゴスリツキの暴政君主に対する抵抗権や人民主権論は初期スチュアート朝にはじまる反王党派の運動を支持するものとなる。こうした状況にあるからゴスリツキの書物は反王党派の運動員たちに広く読まれ引用されていたのである。H. E. Tytus Filipowicz, “The Accomplished Senator”, *Proceedings of the American Society of International Law* (1932), p. 234.

にもなんらかの影を落とすからである。とすれば、それはまた独立前後のアメリカの政治思想にも影響を及ぼすであろうことを暗示する。

共和主義という斬新な政治思想の影響のもとにアメリカは1776年独立宣言をおこない1789年合衆国憲法を採択する。そこに登場する人民主権、共和主義などの新思想は世界を驚かせたが、同じものはヨーロッパ最初の成文憲法、ポーランド「1791年5月3日憲法」にもみられる。これにはアメリカ独立宣言、フランス革命の影響もあるが、むしろ16世紀から18世紀にかけて彼らなりの人民主権、共和主義という思想を温存していたポーランドの伝統文化を再現させたというべきであろう<sup>(1)</sup>。郷土の先輩ゴスリスキ（Goslicki）はその面では確かな貢献をしている。またアメリカ独立宣言にも政治思想面での関係がある。然るべく評価されるならば彼を影響力ある人物として扱わなければならないとするのは、そうした理由によるのである。

ゴスリスキに関する論考はわずかしき存在せず、しかもポーランドと移民のいるアメリカに偏在する。それらの多くは歴史や思想の視点から扱われるが、本稿は人権思想の視点から考察することとする。

なお中世ポーランドは当時の他のヨーロッパ諸国と比較すると特別な国内事情を抱えていた。貴族の国と言われるように他国よりも貴族が占める割合がたかく、政治の実権は国王よりもシュラフタ層（貴族）にあったのである。文化の面でも宗教の面でもポーランドは特異な進歩をみせてお

---

(1) ポーランド1791年憲法は第4条で「我々はすべての人間の完全なる自由を宣言する」と定め、続いて第5条で「社会のすべての権力は人民の意思にある」と規定するところから、全面的な人民主権主義に立つかのようなのであるが、同憲法は第2条でシュラフタ（貴族）の「私的公的生活に対するあらゆる自由と特権の優先」を宣言するようにシュラフタの政治的権力を存置している辺りを考慮すると、純粋な人民主権主義とは程遠いにしてもそれに接近する思想を採用しているのである。

り、それらがまたゴスリスキに影響したと考えられるので、最初に政治経済の状況、宗教や文化の思潮といったものを概観することからはじめる。

## 二. 中世ポーランドの国情「君主主義から共和主義へ」

ゴスリスキの思想を理解するには先ずポーランド史と国情を知っておく必要がある。それは当時のポーランドは他のヨーロッパ王国と異なる形で発達してきた経緯があり、それに伴い独自の文化が存在しており、それがゴスリツキにも表われていると思われるからである。

**ポーランド史の概要** ポーランドは「10世紀に歴史の霧（かすみ）の中からうまれた」<sup>(12)</sup> と言われ、10世紀末から14世紀まではピアスト朝（Piast dynasty: 992-1370）が治める〔その間12世紀初期から14世紀初期までの分裂時代および14世紀初期に空位の時期がある〕。

ピアスト朝の始祖ミエシコ I 世（Mieszko I）はプリミスリド王朝（Premyslid dynasty）のチェコ公の娘と結婚し、960年から992年にかけてポーランドのポズナンで生活した。その翌年ミエシコは婚姻契約にもとづき原始宗教をすてさりキリスト教に帰依する。その後死没するまでに大地域を5つ併合するが周辺との軋轢をさけるためミエシコ 1 世は王国をローマ教皇の直接保護のもとに置くよう要請した<sup>(13)</sup>。ポーランドは以後その領土と

---

(12) Davies, op cit, p. 52ff.; Jerzy Lukowski and Hubert Zawadzki, A Concise History of Poland, 2<sup>nd</sup> ed. Cambridge University Press, p. 83; ステファン・キェニエヴィッチ編, 「ポーランド史」(加藤一夫, 水島孝夫訳), 恒文社, 1966年, 188頁; 伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編著, 「ポーランド・ウクライナ・バルト史」, 山川出版社, 1998年, 43頁。

(13) Jerzy Kloczowski, A History of Polish Christianity, Revised ed. Cambridge Univ. Press, 2000, p. 5ff.

住民に対する統制を徐々に強めていく。14世紀までの治世下において外部からモンゴルの襲撃（1241, 1259）、修道僧ドイツ騎士団の攻撃（1327-32）をうけて難儀するが、それらに備えるためにカジミエシ3世（位1333-70）がリトアニアと結ぶ防衛条約（1325）<sup>(14)</sup> は後にヤギェウォ朝を誕生させる素地となる。辺境にて常備軍の兵士として国防にあたる土地所有の騎士は地位を強くするが、大多数の兵士は農奴さえもたない下級騎士である<sup>(15)</sup>。ピアスト朝末期、土地所有のシュラフタ騎士は地方議会の議員として民主主義の発達に寄与する。カジミエシ3世は13世紀中期ユダヤ人に自由をみとめ、さらに難民の受入れをも始めたことで後にポーランドは世界最大のユダヤ人の共同体となる。カジミエシ3世は既に1355年「ブダの法」(Act of Buda)にて、甥のアンジェー家ハンガリー王ルドウィクのポーランド王就任と交換にシュラフタには従来のすべての法と特権の容認を約束していたが、カジミエシ王没でピアスト朝が断絶すると遺言によりルドウィク(Ludwik)がアンジェー朝(Angevin dynasty)ポーランド国王になる(ポーランド王, 位1370-86)。

ヤギェウォ朝(Jagiellonian dynasty: 1386-1572)は、リトアニア大公ヨガイラ(Jogaila)とポーランド女王ヤドヴィガ(Jadwiga)の婚姻、ヨガイラのキリスト教への改宗、ウワデスワフ・ヤギェウォ(Władysław-Jagiello)への改名などがあり、国王ウワデスワフ2世ヤギェウォ(位1386-1434)として開かれ、以後186年間にわたりポーランドとリトアニアを治めることになる。これはドイツ騎士団の攻撃に対抗するためにリトアニアとポーランドが同君連合を結成しての誕生である。ヤギェウォ朝はヤゲロー朝とも言われる。

(14) Iwo Cyprian Pogonowski, Poland: An Illustrated History, Hippocrene, 2000, p. 33.

(15) Ibid., p. 29.

ヤギェウォ朝のポーランド「王」はリトアニアでは「大公」を兼任し、対外的には「君主」となる。当時のポーランドは、人口1割弱のシュラフタが選挙で国王を選び、シュラフタ中心の身分制議会で国政上の主導権をにぎっていたため君主を擁しながらも「ポーランド共和国」と呼ばれる。シュラフタを中心に謳歌される民主主義は貴族の民主主義と呼ばれていた。シュラフタとは貴族のことである（詳細は後述）。そうした中でポーランドとリトアニア両国の貴族が一五世紀初めに交わした協定は、崩壊の過程にある君主主義の終章となるものである。186年間続くヤギェウォ朝はまたルネッサンス期と重複しポーランドの文化を開花させた時代でもある。当時ポーランドはヨーロッパでも大国の部類にはいる国土（フランスの約2倍）を有しており、北はバルト海から南は黒海の北部に至る地域まで占めていて歴史上最盛期を誇っていた。王国ではあるが他の絶対主義体制下の王国とは様相をまったく異にする政治制度を有していたのである。

ヤギェウォ朝末期、継承者の欠如から両国の関係断絶を憂慮する貴族が両国のさらなる関係強化をもとめ、1569年7月ルブリン議会で両国の制度的一体性を図ることとなる。国王は共通の選挙で選び、議会は合同で開催し、外交政策は統一して行うことになる（但し行財政機構と軍隊は別々）。こうして国王を内外の貴族から選出する選挙王制の時代にはいることになる。

**選挙王制**（Elective Monarchy: 1572-1795）はシュラフタ（貴族）の選出する国王による統治をするものである。同様のことはヤギェウォ朝でも理論上みられていたが、今度はそれを制度として実施しようとする。国王はこれまでシュラフタとの交渉でかれらの要求をのむ場面がしばしばあったが、選挙王制でも国王はシュラフタによる協議で選定されるが、ほとんどの場合、シュラフタは国王に条件をつけ、国王がこれを承知するのが常である。そうしたことはピアスト朝、ヤギェウォ朝でも起きていた。外国

の候補貴族の場合、自ら条件を示して関心を引こうとする。その結果、選挙王制では市民的要求が採り入れられ共和主義的傾向はいちだんと強くなる。そうした例の代表的なものが、「パクタ・コンヴェンタ」と「ヘンリク諸条項」である。国王がそれに反する行動をとることは許されていないのであるから、その意味ではそれは社会契約の嚆矢であるともみることができであろう。自由は法律で権利や特権が付与されるから生まれるが、共和主義では人民がそうした自由を享受していることが重要なのであって、これを他国に先がけて16世紀～18世紀に享受するポーランドの人間は、我国は他国とは違うのだと自覚したのである<sup>(6)</sup>。選挙王制末期、開明的な国王スタニスワフ2世（位1764-95）のもとでヨーロッパ初の人民主権に基づく「1791年憲法」の誕生をみる。しかし自由の謳歌は束の間のことであった。その直後、隣接の大国は「自由、平等、民主主義」などの伝染病の蔓延を絶滅すると称して1795年に国家消滅を強制したのである<sup>(7)</sup>。そこに至るまでポーランドは周辺で起きる戦争〔30年戦争（1618-48）、北方戦争（1700-21）、7年戦争（1756-63）〕にもかかわらず国内体制を維持してきたし、また貴族の自由を廃止することもせずに国家を持続させてきたのである。

ポーランドの歴史を概観すると以上のような経過を経ているのである。

(6) Anna Grzeskowiak-Krwawicz, Anti-monarchism in Polish Republicanism in the Seventeenth and Eighteenth Centuries, in Martin van Gelderen & Quentin Skinner(ed.), Republicanism, vol. 1. Republicanism and Constitutionalism in early Modern Europe, p. 43 at 45.

(7) 国際関係の視点からすると、モスクワ大公国当時のロシアは弱かったがそれがロシアとなると相対的に国力を強めてきたのに対し、かつての大国ポーランドは過度の自由をもって秩序を維持するシュラフタの履き違えにより虚弱な体質になった点は見逃せない。その原因となる典型的なものは17世紀中期以降に頻発する「自由拒否権」の行使である。これがポーランド解体に繋がったのである。Nicolas V. Riasanovsky, A History of Russia, Six Edition, 2000, p. 152, 181, 264-275.

以下では人権思想に関係ある箇所を重点的に眺めることにする。

### ヤギェウォ朝ポーランド：君主主義から共和主義へ

ピアスト朝（992-1385）はカジミエシ3世（Kazimierz III, 位1333-70）に継嗣がないため断絶し、遺言によりアンジュー家のハンガリー王ルドウィク（Ludwik）がポーランド王（位1370-82）となる。これは、当時の政治状況に接すると、ポーランドのシュラフタ（貴族）の利益がルドウィクの政策と折り合った結果であり、ルドウィクがポーランド王に選ばれたというよりも、ポーランドがルドウィクの領地に取り込まれたと言うのが実情である<sup>(8)</sup>。

ポーランドの共和主義の萌芽は以下でみるように14世紀以来みられるが、頑なな君主主義は15世紀初めに姿を消しそれに代って共和主義思想が根を張ることになる。

**国家と国王の観念の分離** 君主制の崩壊と共和主義のはじまりは国家と国王の観念の一体性が崩れていく過程からみられるが、それを14世紀末のカジミエシ3世の遺言を足掛かりにみてみよう。

ピアスト朝では国王は世襲制が原則であったがそれは国を為政者の所有物とする家産思想と一体をなすものであった。しかしカジミエシ3世時代の14世紀に「ポーランド王国王冠」という言葉が登場するが、これは、国家自身が国王とは別に権利をもつとしその総体は王冠によって象徴されとする概念であり、その核心は国家の権利と領土の不可譲渡性にあった。しかしカジミエシ大王自身は、国家自身が権利を持つという概念を理解できずにおり、王国を依然として家産とみなしていた<sup>(9)</sup>。こうしてポーランドでは14世紀以来、国家と国王は別個の法的実体として考えられる段階に

---

(8) Davies, op cit., p. 88.

(9) 前掲「ポーランド・ウクライナ・バルト史」, 70頁。



きていたのである<sup>20)</sup>。

14世紀後半、カジミエシ3世が「孫にポーランド領土の一部を贈与する」旨の遺言をし、シュラフタがこれを拒んだ事実は「国家と国王の関係」の考察に重要な示唆を与える。カジミエシ3世に継嗣がないため甥のハンガリー王ルドウィクがポーランド王に指名されても両国の利害が一致したので問題は生じなかったが、遺言で領土の一部を孫カスコに遺贈する件に関しては一転してシュラフタが強く反対したのである。カジミエシ3世の遺言のシュラフタによる拒否は、一人の人間による国家の処分行為は法に反するからであり、法は国王の上位にあり国王は法の下にあるとする原則を例証するものである。この原則はポーランド王国の不文法の一部となる。こうして国家と国王の権威の分離が14世紀末にはみられるに至るのである<sup>21)</sup>。

ヤギェウォ朝になると事情はさらに進展する。初代国王ウワデスワフ2世（位1386-1434）治下、ポーランドとリトアニアの貴族間で、共和国のあらゆる問題は貴族との合意がなければ決定できないとする1401年「ヴィルノ・ラドム協約」と、2国間に関係する問題は双方貴族の合同会議で決定するとする1413年「ホルドウォ協約」が交わされた。これらは国王を顧慮せず政治をおこなうという貴族の決意であり、すでに崩れつつある厳格な君主主義の崩壊を決定的にしたのである<sup>22)</sup>。さらにウワデスワフ2世は1425年「ブルゼスクの法」（Act of Brzesc）で、王位継承者を国王の兄弟にも広げて認めている。国王を直系卑属の世襲に限るどころか傍系にまで広げたりシュラフタも国王選出に関与するということは、世襲制のもと

<sup>20)</sup> Waław Uruszczak, *Constitutional Devices Implementing State Power in Poland, 1300-1700*, in Antonio Posada-Schioppa (ed.), *Legislation and Justice—Origins of the Modern State in Europe, 13<sup>th</sup> to 18<sup>th</sup> Centuries*, Oxford Univ. Press, 1997, p. 175.

<sup>21)</sup> Waław Uruszczak, *ibid.*, p. 175.

<sup>22)</sup> Norman Davies, *op. cit.*, p. 95-6.

で理解されていた国家を国王の家産とする意識をかなぐり捨てて初めて可能となるものである<sup>23)</sup>。国王の選出はシュラフタの影響力が増大しかつ議会制度の発達と平行して確固たるものとしてあらわれる。同時代のヨーロッパ絶対王政国が世襲制のもとで国王が権力を行使しながらもその行為の責任については無答責主義を貫いていたのと比較するとポーランドの極め付きの先進性を感じないわけにはいかない。

ウワデスワフ2世以降の国王は「ブルゼスクの法」のもとで、その子息ウワデスワフ3世が1434年に就任する。これ以降カジミエシュ4世(1445)、ヤン1世(1492)、アレクサンデル(1501)、ジグムント1世(1506)、ジグムント2世アウグスト(1548)は先代王の子息か兄弟である。シュラフタによる国王選出が本格的になるのは選挙王制(1572-)からであるが理論上それはヤギェウォ朝から始まっているのであり、こうして15世紀のポーランドでは国家と国王の観念の分離は完全になされていたのである。

国王の選出は(国王)選出議会に参集する諸身分代表の面前にて枢密院がこれをおこない、さらに国王は戴冠の宣誓をする。儀式によると国王は王国の拘束力ある法律すべてに従うことを誓約する。それらは例えば、諸身分層に関するもの、社会と個人に関するもの等である。こうして戴冠式の宣誓は、法は国王の上位にあるとする原則を定めるのである。

そのような国家と国王の観念の分離は、国王の上位に法は存するとの原則を確かにもたらすけれども、他方で国王の義務の範囲が必ずしも明確でないためその原則には実際には不完全な側面もあるのであり、その結果ポーランドは15、16世紀に数多くの政治的緊張を経験するのである。ヤギェウォ朝に流行った理論によると、国王は法と特権を絶対に遵守しなけ

---

<sup>23)</sup> Ludwik Kos-Rabcewicz-Zubkowski, Polish Constitutional Law, in WJ Wagner (ed), Polish Law Throughout the Age, Hoover Institution Press, 1970, p. 223.

ればならないというものではなかったのである<sup>24)</sup>。

国家と国王の観念の分離は、結果としてシュラフタに有利なかたちで現われ、多くの権利を認められて国王と対立するにおよぶ。それはまた共和主義の思想として定着していくのである。

**国王と貴族の関係** アンジュー朝ポーランド王ルドウィク (Ludwik, 1370-82) の最大の関心事は息女マリヤ、ヤドヴィガのどちらかに王位を継承させることであったが、これは、1374年「コシツェの法」(Statute of Kosice) でシュラフタに財政面で優遇する策【すべての貴族に領地の土地税の免除、領地で小作農が耕作する土地には従来<sup>25)</sup>の6分の1の税に減額】と交換する形で容認させるのに成功している。同法は、ピアスト朝時代にシュラフタに認められていたすべての権利を認めただうえで更なる特権を認めたのである<sup>26)</sup>。こうしてポーランド憲政史上でも画期的な出来事とされる、シュラフタへの大幅な財政的な権利、特権が認められたのである。

国王ルドウィクの関心事は、マグナート(有力貴族)が主導権を発揮するなかで解決されたが、彼らはシュラフタ(中小層貴族)や都市の代表をも交えて「王国の全共同体」と称し君主の選択においても活躍した<sup>27)</sup>。マ

---

<sup>24)</sup> Waclaw Uruszczak, op. cit., p. 176.

<sup>25)</sup> Davies, op. cit., p. 89-90. 但し「コシツェの法」は新税の課税については地方議会の承認を得れば可能とすることにルドウィク王は同意している。Mark Brezeinski, *The Struggle for Constitutionalism in Poland*, St. Martin's Press, 1998, p. 33; Jacek Jedruch, *Constitutions, Elections and Legislature of Poland, 1493-1993*, Revised ed., Hippocrene Books, 1998, p. 31. 地方議会での新税扱い問題は15世紀初頭になって議会制の発達との関係で浮上する。なおポーランド国内の法政・議会の動きは, *Chronology of Poland's Constitutional and Political Development*, IC Pogonowski, *Poland — A Historical Atlas —*, op. cit., pp. 17-44 参照。

<sup>26)</sup> 前掲「ポーランド・ウクライナ・バルト史」, 72頁。

グナートが国王に選んだのは次女ヤドヴィガ（10歳7ヶ月）であるが、これはマグナートが長女の婚約者、オーストリア皇太子の受容れを拒んだことを意味する。ヤドヴィガがリトアニア皇太子と結婚する際にもマグナートで構成される枢密院は大きな影響力を示している<sup>27)</sup>。

以上から知られるようにポーランドのすべての問題は、王位継承者の指名を含めて、国王の一存で決定できない状況が当初から存在していたのである。ヤギェウォ朝は継承者のないジグムント2世の死により1572年断絶し、以後は選挙王制となるが、ジグムント2世存命中に決定したポーランドとリトアニアの国家制度の統一は両国の貴族が予め決めていたものである。また選挙王制では国王はシュラフタによって選出されるのである。すべての問題はシュラフタが主導権を発揮して初めて解決されることになる。こうして、「ポーランドでは、老国王が自分の息子の王位継承権を、国王権力を制限して多くの自由を保証することによって買い取らねばならなかった」<sup>28)</sup>という事実をわれわれは知るのである。基本的にこれの繰り返しがみられる結果、国王の権力は弱くなりシュラフタの立場は強くなるのである。

**貴族の台頭** シュラフタ層は、コシツェの特権（1374）で実質的な課税はされないという財政上の優遇を獲得し、チェルヴィンスキの特権（Privilege of Czerwińsk, 1422）、イエルドニャの特権（Privilege of Jedlna, 1430）で身分上の優遇措置を受けながら自らの権力と財力を徐々に増殖する。殊にイエルドニャの特権は、かりにシュラフタ層に王令に反する行為があっても国王は裁判所の令状なしに彼らを逮捕はできないため権力の弱化を進める。そこに国王と貴族に政治権力の逆転現象がみられ、シュラフタ層の貴族は限られた範囲内にしても経済的な富を手にし、精神的に

---

<sup>27)</sup> 前掲。

<sup>28)</sup> 前掲「ポーランド史」, 136頁。

余裕ある立場にあることから貴族の自由が生まれるのである。

シュラフタ層は、「コシツェの法」と「チェルヴィンスクの特権」<sup>29)</sup>でえた財政上の保障に加え、「イエルドニャの特権」で裁判所の判決なければ投獄されないという身分上の保障をもえている。これは、「裁判で有罪でない限り、誰も投獄もされず罰金も課されない」(Neminen captivabimus nisi iure victum) とする原則を確認するものである<sup>30)</sup>。同様のものはイギリスの1679年「人身保護令状」(Habeas corpus) にみられるが、イギリスより250年も先行することは注目される。イエルドニャの法によると、これは国王の権力をいちじるしく弱める一方、シュラフタに市民的自由を発祥させるものとして注目される<sup>31)</sup>。イエルドニャの特権が保護の対象にするのは形式上シュラフタ層だけであるが、実際には当時盛んであった自由の精神と宗教的寛容の精神のもとで一般の市民、ユダヤ人、自由農民もその恩恵に浴しているのである<sup>32)</sup>。さらにその法理は1588年にはシュラフタに犯罪者隠匿の嫌疑があっても家宅捜査できないまでに拡大されている<sup>33)</sup>。

29) 「チェルヴィンスクの特権」は *Nec bona recipiantur* 特権とも言われる。これは、成分法に基づく裁判に依らなければ個人財産の接収を禁止するという主旨からすると、財産上の保護を約束するものである。他方その保護は、ある犯罪の罰則として財産の接収を認める現行法の下で、という但し書きのもとで容認されるのであり、その犯罪とは国家の緊急事態に際しての軍事召集に対する拒否である。シュラフタの騎士で召集を拒んだ人数は1497年に2,400人を数えている。Jedruch, op. cit., p. 31.

30) 小ポーランド向けの「イエルドニャの特権」(1430)がだされる5年前に大ポーランド向けの1425年「ブジェシチ (Brześć) の特許状」が出されている。同一内容であるがイエルドニャが有名である。

31) Edward Opaliński, *Civic Humanism and Republican Citizenship in the Polish Renaissance*, in Martin van Gelderen and Quentin Skinner (ed.), *Republicanism: A shared European Heritage*, vol.1, Cambridge Univ. Press, 2002, p. 147 at 148.

32) IC Pogonowski, *Poland: An Illustrated History*, op. cit., p. 45.

33) WJ Wagner, *Justice for All: Polish Democracy in the Renaissance Poland*, op. cit., p. 133.

上記にシュラフタ（貴族）が頻繁にでてくるが、これについては説明を要する。まず中世の社会階層についてみると、国王、僧侶、貴族、一般市民、ユダヤ人、小作農の六つの身分階級があり、人口は1569年（ルブリン合同）当時で750万人、1634年当時で約1,100万人<sup>84)</sup>とされ、貴族の人口がおおよそ10%、一般市民もユダヤ人も各10%、僧侶は約5%と推定され、最多は小作農で16世紀から18世紀に約65%強を占めている<sup>85)</sup>。そのシュラフタ（貴族）について歴史学者 N. デイビスは、「近代初期のポーランドの社会構造を考察するに際して、後期の歴史に登場する基準をもってそれを判断することは大きな誤りを犯すことになる」と注意を喚起し、続けて述べる。

「ポーランドの社会階級は生産手段の有無、収入高、経済状態などによって決まるのではなく、法的権利と伝統により社会内部において意図される役割によって決められているのである。歴史家ですら貴族の中の力関係を考慮して並みの貴族という意味でシュラフタ szlachta、大物貴族という意味でマグナート magnateria なる言葉を使い分けたり、また英国流に倣って紳士 gentleman と貴族 peer に分けて述べたりするのは正しくない。英国流にいわれるジェントリーはポーランドではシュラフタ szlachta に該当するのである。」<sup>86)</sup>

---

84) 国土と人口は一帯のものであるが、ポーランドに限ってそれは妥当しない。時代により国土の変更、減少が生ずるのに伴い人口も激動するからである。1634年当時ポーランドの国土はフランスの2倍、モスクワ公国より僅かに大きくヨーロッパ最大の面積を擁していたが、人口は1,100万人でこれはフランスやモスクワ公国のそれよりも少ない。Norman Davies, op. cit., p. 23. 1686年にはヨーロッパで3位の面積になり、1773年には英国と同じくらいまでに減少し、1795年には国土が消滅するのである。

85) 16世紀の小作農の約40%は貴族の奴隷となり、約10%は王国領土の奴隷、教会の奴隷も同じ%である。自由小作農はその半分しか居ないだろう。18世紀後半でもこの構成比に変化はない。Davies, op. cit., p. 167 の図表参照。

86) Davies, op. cit., pp. 157-160.

ヨーロッパ諸国の貴族の割合はそうした事情により、フランスの1%、イギリスの2%に対し、スペイン、ハンガリーでは5%と少し高くなるが、ポーランドは7%~14%も示しており<sup>37)</sup>、他国と比べて群を抜いて高い割合を示している。

貴族の総称であるシュラフタ szlachta は理念上すべてが平等な関係にある。しかしシュラフタには「領地」を有するか有さないかで差があり、領地を所有するものは富裕になりそれに付随する権力をもつ層となるが、土地をもたない側はそれらとは無縁の層となるのであり、実際は平等ではなかったというのが真相である<sup>38)</sup>。こうしてシュラフタには、最上位に名門の血統に繋がる「真紅の貴族」、経済的に富裕で権力のある有力貴族「マグナート」(Magnates) があり、その下に政府、官僚および軍隊で活躍するのが多い「中流の貴族」(Zamozna szlachta) が、その下にシュラフタの半分を占める、貧困層と同意義の「下流の貴族」(Drobna szlachta) があるなど落差があったのである<sup>39)</sup>。この差は17世紀中期からさらに広がる<sup>40)</sup>。国王の有する王領土はポーランド・リトアニア共和国土全面積の15

---

37) 貴族の人口には、10%超とするのが多い。Davies, *ibid.*, p. 166. 他方、10~14%とする見解もある。Wenceslas Wagner(ed.), *Introduction, in Polish Law throughout the Ages*, 1970, p. 5.; Mark Brzezinski, *op. cit.*, p. 34. シュラフタ(貴族)の割合が分かれるのは、例えば17世紀中期に村落やそれ以上の土地を有する貴族が全貴族中で43%居たが、まったく持たない無産の貴族が57%も居たのである。下級貴族ではそれは顕著であり、スペインでは無産の貴族はたちまち淘汰されたのに対し、ポーランドでは急速に増殖したのである、その結果下級貴族のありさまは農奴よりも酷い状況になり、18世紀には自発的に農奴になった多くの例があり(Davies, *ibid.*, p. 177-78), それらをどのように扱うかによりシュラフタ層の割合は増減するであろう。

38) Antoni Maczak, *Polish Society and Power System in the Renaissance*, in Fiszman(ed.), *The Polish Renaissance* *op. cit.*, p. 17.

39) Polish Nobility Association Foundation. Retrieved 2010/05/15. 経済的な側面からシュラフタの分類については、Davies, *op. cit.*, p. 171. 参照。

40) 狭小な領地を有する貴族の中には小作農と区別できないほどのものの存在が

-20%であるに過ぎず<sup>(41)</sup>、残る殆どはごく少数のマグナート（有力貴族）のものであったのである<sup>(42)</sup>。

平等であるべきシュラフタに貧富の差ある現実には、16世紀初めに下層シュラフタから諸法の完全実施を求める「法の執行運動」が起きた。それは国家活動の四つの主要分野、すなわち財政、軍事、司法、行政の面での改革を要求する<sup>(43)</sup>。その運動には特定の指導者がいたわけではないが、16世紀中頃までにはプロテスタント系の人物が相当数活躍しておりこれは宗教改革と結びつくのである。

**議会における貴族階級** ポーランド語で「議会」を意味する言葉 Sejm は古代スラブ語では人々の集会や会合の意味をもつ。初めての集会は12世

---

ゝ知られている。下級貴族は経済的苦境、農業の不作により悩まされているが、ポーランドを荒廃させた17世紀の戦争時はとくに辛酸を経験している。その結果、苦境をのりこえられる有力貴族とそれが不可能な下級貴族との格差はさらに開いた。こうして17世紀中期あたりを境に「貴族の共和国」は「マグナートの共和国」に変化する。共和国のリトアニア側で領土の75%は、18世紀後半には、2%未満の貴族によって所有されていた。専門家によると、絶頂期には全貴族の0.7%に過ぎないマグナート17家が63.3%を所領していたとされる。

(41) Jerzy Lukowski, *Liberty's Folly — The Polish-Lithuanian Commonwealth in the Eighteenth Century*—, Routledge, 1991. p.12.

(42) Daniel Stone, *The Polish-Lithuania State, 1386-1795*, University of Washington Press, 2001, p. 294-5, 298-9 ; 18世紀のポーランド・リトアニアでは65-70%がシュラフタに、7-14%がカトリック教会に属していたとされる。Lukowski, *Liberty's Folly*, p. 13.

(43) 運動の端緒は1504年全国議会制定の王領地の譲渡は止めるべきとする法律である。また上級官職の権限も厳しく規定され、兼職を禁止する措置がとられた。それらの影響を受けるのは王室の顧問官たちであった。彼らはその地位にいることにより利益を得たり影響力を及ぼしていたからである。そこで貧乏シュラフタの最初の要求は、マグナートや債権者に王領地を譲渡するくらいなら君主は自分の財産から国土防衛費用を支弁せよ、というのであった。これが結果的にはシュラフタへの課税を無しにするのだが。Lukowski & Zawadzki, *op. cit.*, p. 71.



紀中期前に地域ごとにもたれており、13世紀には各領主が法廷と小さな軍隊をかかえていたが、カジミエシ大王（位1333-70）末期には軍事防衛と消滅寸前のピアスト朝の出先機関を整理統合するなかで、領主らが政治を意識する評議会をもつことにより地方議会（sejmik）が現出する<sup>44)</sup>。ウワデスワフ 2 世（位1386-1434）治下の1404年、コシツェの特権（1374）で新税導入に関しては地方議会の同意が必要とされるのに関連して議会制を進展させる動きがでてきたし、また1422年には財源確保のため枢密院顧問に地方シュラフタ層と基金確保について相談させている<sup>45)</sup>。当初課税はないと受けとられたコシツェの特権は本質的には地方議会の同意のもとに課税できることを考えると、ポーランドは「代表なければ課税なし」原則をイギリスよりも400年前に認めていたことになる。

全国レベルの合議機関として15世紀初期には聖職者とマグナートからなる諮問機関、枢密院（Privy Council）だけがあったが、カジミエシュ 4 世（位1446-1492）治下の1454年、国王がシュラフタの騎士に特権を認めるニエシャヴァ（Nieszawa）の勅令<sup>46)</sup>を契機にして各地のシュラフタは自ら関係する政治や法律作成で頻繁に会合し、国王の政策をも検討するようになり、こうして15世紀中期に議会の発達はやがて決定的になる。

従前は枢密院から成長した上院（Senate）だけの1院制であったが、15世紀末には全国議会（General Sejm）は、1493年から上院、下院の2院制となる。2院制議会の確立には、マグナート（上流貴族）に対するシュラフタの優位を支持するヤン・オルブライト（Jan Olbracht, 位1492-1501）の後押しがあった<sup>47)</sup>。こうして1493年以降、全国議会は上院（Senate）と、

---

<sup>44)</sup> Jecek Jedruch, op. cit., p. 34.

<sup>45)</sup> Ibid., p. 31.

<sup>46)</sup> これは「貴族の同意が無ければ」貴族に新たな課税もしなければ軍隊に徴兵もしないとする約束である。

<sup>47)</sup> 前掲「ポーランド史」, 173頁。

地方議会 (sejmiki) から選出される議員で構成される下院 (Chamber) とからなる2院制議会を形成する。上院 (Senate) はカトリック教の高位聖職者 (大司教, 司教) と国家の高位官職保有者 (県知事, 大臣など) などの90名前後から構成され, それらは原則としてカトリック教徒であった。その構成員は, ポーランドとリトアニアを統合するル布林合同 (1569) 後は約140名に増加する。他方, 下院 (Chamber) は各地方議会から選出される議院2名ずつの議員で構成され90余名中3分の1はシュラフタにしてプロテスタントであり<sup>48)</sup>, ル布林合同 (1596) 後は約170名を数えていた。16世紀ポーランドはシュラフタが実力をつけてきたことで「貴族の国」と呼ばれるまでになり, 政治の実権の殆どは彼らによって握られていたのであるが, 宗教改革で非常に多くのシュラフタが新教徒 (カルヴィン派, ルター派, ポーリッシュ反三位一体派, チェコ兄弟団など) に改宗したためにカトリック教徒は議会において多数派を占めることさえなかった。貴族同士の宗教上のもめ事は国王に有利になる。シュラフタ層はその種の内紛を起こすには余りに連帯が強かった。これは司教ミスコウスキが1565年議会に「聖書の理解が違っても仲間の愛情を閉ざすな!」と訴えたことに現われている<sup>49)</sup>。シュラフタは宗教上の内紛は得るより失う方が多いと理解していたのである。

16世紀初頭, シュラフタの権力や自由を強化する法律が, 国王の権威が失墜するのに反比例するように成立する。アレクサンデル王 (位1501-06) 治世下, 先ず1501年議会は, 実弟を次期国王に就ける代わりに国王から法

---

<sup>48)</sup> Jedruch, op. cit., p. 60.

<sup>49)</sup> Janusz Tazbir, *A State Without Stakes: Polish Religious Toleration in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, 1967, p. 50, 117, 121. Cited in Daniel H. Cole, *Poland's 1997 Constitution in its Historical Context*, *Saint Louis — Warsaw Transatlantic Law Journal*, vol. 5, 1997, p. 9.

案提出権を奪うことで国王に対する優位性を確保し、次いで1505年議会は「ニヒル・ノヴィ法」(Nihil novi Act)を可決するのである。この骨子は、共和国の法律および行為全般に関しては両議院の貴族の一致する同意がなければ国王は法律を制定する権限がないとするものである(但し、王領都市、王領土、王領農地、鉱山、封土及びユダヤ人に関するものを除く)。これはポーランドのシュラフタが王権との関係において国王に勝利したことを意味し、これ以降シュラフタが国王に優位するという時代を築く画期的な法律である<sup>50)</sup>。同法はまた、国王も議会の不可欠の構成員であることを鮮明にする。

上院と下院では「ニヒル・ノヴィ法」のもと議員の一致する意思表示がなければ決議が成立しないため、一人の反対表明でも議事の進行も決議の成立もなくなる。この自由拒否権(Liberum veto)を使って議員が「反対」、或いは「不賛成」と叫ぶと議長が休会を宣して会議は終了せざるを得なくなる<sup>51)</sup>。これの行使は、全国議会で1652年以降2年毎に開催の議会55回のうち48回報告されている<sup>52)</sup>。これは立法機関を機能麻痺にするもので褒められたものではない。「ニヒル・ノヴィ法」は後世に悪影響をおよぼすことになる。

ポーランドでは国王の権力が削がれる場面は多々あるが、他のヨーロッパ王国と違って王権神授説をもって国王権力の絶対性が主張される場面はまったくみられていない。専門家によると、ポーランドでは王権は最初から最高の権力とは捉えられておらず、王権の上には国家が存在するとされていた。国家に対する理解は16世紀では未だ抽象的であったが、16世紀から17世紀への曲がり角では、「貴族全体の参加をえて政治的に活動する市

---

<sup>50)</sup> Davies, op. cit., p. 164, 254.

<sup>51)</sup> Davies, ibid., p. 264.

<sup>52)</sup> Mark Brzenski, op. cit., p. 39; Lukowski, op. cit., pp. 91-2.

民全体」が国家として理解されるようになっている<sup>53)</sup>。こうした国家像は、理論上シュラフタの権利とされる「君主の選出」、君主との契約（「パクタ・コンヴェンタ」、「ヘンリク諸条項」）が存在するという事実、この契約の他方当事者が共和国である、という事実からも確認される。したがって王権は初めから非常に限定的なものであり、さらにそれは神に由来するような抽象的な権利ではなかったのである。この理論と政治的实践からして、君主は絶対に法の淵源たりえず、自ら施政する国の法律に服することになる。このことは「パクタ・コンヴェンタ」にて国王自らが確約する。こうした事情の下にあっては、国王の属性である王権神授説がでてくることはありえないのである。

#### 選挙王制ポーランド：一般国民と国王との約束「社会契約」の登場

ヤギウエオ朝の後、ポーランド共和国は選挙王制（elected monarchy）となる。これはシュラフタが国内外の有力貴族や諸国の皇族の中から選出した国王をもって政治をつかさどる王制である。

選挙王制では国王選出まで国王不在の空白期が生ずるが、シュラフタは前年フランスのサンバルテルミの虐殺の二の舞の発生を懸念して1573年1月ワルシャワ連盟を結成しカトリックとプロテスタントの衝突を回避する協約を作成し、これは全国民が遵守しなければならないとされた<sup>54)</sup>。当時ポーランドで最も信者の多いのはカトリック教であり、1573年は50%を超えると推定される<sup>55)</sup>が、その他に東方典礼カトリック教、ロシア正教、プロテスタント（ルター派、カルヴァン派）、ユダヤ教、イスラム教などあ

<sup>53)</sup> Anna Grześkowiak-Krwawicz, op. cit., p. 47.

<sup>54)</sup> 宗教的寛容は後には全ての宗教・宗派まで認められるが当初は新旧のキリスト教だけが想定されていた。小山 哲「ワルシャワ連盟協約の成立—16世紀のポーランドにおける宗教的寛容の法的基盤—」, 史林73—5 (1990), 80-115頁。

<sup>55)</sup> カトリック教徒数は図表 (Davies, op. cit., p. 127.) からの推定である。

らゆる宗教があった。多くの宗教をかかえる中で不測の事態を避けるべくワルシャワ連盟は動いたのである。

**ワルシャワ連盟による国王の選出** 国王を決める準備議会はワルシャワ近郊のカトリック勢力の強い町に召集され、国王の選出方法は当時無名のザモイスキに任された。国王選出の権利はシュラフタ民主制のもとに地位の上下を問わずシュラフタ全員に認められ、カトリックの推す首座大司教ウハンスキ (Uchanski) が王位空白期の摂政に就任し王権を代行することになった<sup>56)</sup>。国王選出選挙には4万人のシュラフタが参集しており、これは事後の選挙の参集者と比較すると関心の度合いは格段に高いものがある<sup>57)</sup>。ワルシャワ連盟の主要な関心は、異端宗教の禁止（カトリック）か又は宗教的寛容の容認（プロテスタント）かの選択であるが、これには更に外交方針の選択も絡んでおりカトリックは塊を、プロテスタントは仏を支持していた<sup>58)</sup>。仏留学の経験あるザモイスキがフランス最良を告白しハ

<sup>56)</sup> 前掲「ポーランド史」, 186頁; Daniel Stone, op. cit., p. 117.

<sup>57)</sup> 1634年当時の総人口1,100万人の約10%が貴族とすると、11~12万人となりその3分の1が参集したとすると高い熱気を感じる。これ以後、1632年選挙（ウワデスワフ4世選出）では僅か4千人しか参加していない。その後の選挙で有力候補者が自国人である場合には同じ貴族から嫌われる現象が見られている。Jerzy Lukowski & Hubert Zawadzki, op. cit., p. 84.

<sup>58)</sup> この問題では、殆どカトリックのマグナート（上院議員）はオーストリア支持にたち、プロテスタントである多数のシュラフタ貴族（下院議員）はフランスを選択したが、プロテスタントの心配はオーストリアが勝つとオスマン帝国からハンガリーを取り戻して再征服するであろう、そうなるポーランドはウクライナや黒海沿岸にまで国土を広げるであろうが、最後は非常に強力なオスマントルコ軍と対決することになり、タタール人の略奪をそそのかすことになるだろうという点であった。一方、フランスに就くとポーランド・リトアニアはトルコと平和的關係になるのでバルト地方とモスクワ大公国との境界を広げることと専念できる点が有利と考えられた。ただフランス支持にまわると不安視されるのは、ポーランド共和国は南のハプスブルグ家と東のモスクワ大公国から脅威をうけるかもしれない点である。この不安は18世紀中続く現実のものとなる。Daniel Stone, op. cit., p. 117.

ブスブルク家の絶対体制を批判すると会場の空気は一変し、参加者はフランス支持に大きく傾き反対派は相次いで会場を後にした<sup>69)</sup>。連盟はこの直後、事の重要性から「全員一致」の形式をとることにする。署名投票では、カトリック側は連盟の決定を「悪魔との協定」として強く反対し代表は署名を拒否した（但しクラシンスキは署名）<sup>69)</sup>が、プロテスタント代表は全員が署名した。準備議会は摂政ウハンスキがアンリ・ヴァロアを正式に国王に指名して散会した。プロテスタント3派（フェビアン、ルーテル、チェコ・プレスリン）の共同提案とされるワルシャワ協定は1573年1月議会で可決され、ポーランド共和国の「基本法」（constitution）となる（一般に「ヘンリク諸条項」と称さる）<sup>69)</sup>。新国王アンリ・ド・ヴァロワ（Henry de Valois）、ポーランド語名ヘンリク・ヴァレジィ（Henryk Walezy）は全国議会（sejm）で貴族により正式に選出された。

アンリ・ヴァロアは、国王就任を要請する代表团から「宗教的寛容の保障なしでの統治は不可能」との報告にそれを承知した<sup>69)</sup>。選挙王制の新国王にはアンリ・ド・ヴァロワ（位1573-74）が選出されたが、しかしその

---

69) Stone, *ibid.*, p. 117.

69) カトリックから唯一の署名者クラシンスキ（Francis krasiński）は、連盟は宗教一般にも「真の信仰」にも反しないとする。「ワルシャワ連盟は戦争や流血という大なる悪の代わりに異教徒にもある権利を与えるという小なる悪を与えるに過ぎない」と考える。Janusz Tazbir, *A State without Stakes: Polish Religious Toleration in the Sixteenth and Seventeenth century*, 1967, p. 148. Quoted in Daniel H. Cole, *Poland's 1997 Constitution in its Historical Context*, *Saint Louis-Warsaw Transatlantic Law Journal*, 1998, p. 21.

69) Constitution を「憲法」と捉えるのは18世紀後半に登場する「1793年5月3日憲法」が最初であり、それ以前は普通の法の意味で用いられている。Daniel Stone, *op. cit.*, p. 119. その例は, Norman Davies, *op. cit.*, pp. 246-83.

69) 代表团はカトリック9名、プロテスタント4名、上院議員8名、下院議員5名である。Daniel Stone, *ibid.*, p. 119.

直後、兄の仏国王シャルル 9 世の急死によりポーランドを脱出し仏国王となる。後の国王に就くのは、ステファン・パトーリ (Stefan Bathory, 位 1576-86) とジグムント 3 世 (Sigmund III, 位 1587-1632) であるが、この両国王にゴスリツキは仕えている。

**国王の「社会契約」遵守の宣誓** シュラフタは国王を迎える際に 2 種類の契約を用意しており、国王の即位はその受諾を前提とする。2 種類の契約とは、シュラフタと国王の間で交わされる「パクタ・コンヴェンタ」と「ヘンリク諸条項」であり、これら約束は私的レベルを越えて公文書の性格をもつものである。王位に就く者はこの約束を宣誓するのが慣例である。

「パクタ・コンヴェンタ」(Pacta conventa) は国王選出議会の起草するものであるが、そこで規定されるのは、国王は共和国の法律を遵守し、および外交、税金、軍隊など議会側の決める内容を遵守することである。パクタ・コンヴェンタ遵守を誓約することが国王就任の条件とされる<sup>63)</sup>。

「ヘンリク諸条項」(Henrician Articles) は、1573年ワルシャワ連盟が可決した21カ条からなる統治の基本原則を定めるものである。主なものには、宗教的自由の保障、国王は世襲制ではなく貴族による自由選出、国王による最低 2 年毎の国会の 6 週間の議会開催、議会の同意なしに国王の集合的謁見の禁止、議会の同意なしの宣戦講和、軍事動員、課税、配偶者決定の禁止、がある。さらに国王が宣誓に背いて諸条項を不履行の場合、国王に逆らうことができる貴族の抵抗権も規定する。

以上の約束は新国王とシュラフタ間で自主的に交わされる点に特徴があるが、それらはポーランド政治制度を定める基本法の性格をもつのであ

---

<sup>63)</sup> パクタ・コンヴェンタの内容は、例えばウワデスラフ IV 世 (位 1632-48) の時にはバルチック艦隊創設の条項が加えられているように選任される国王により異なる場合がある。

り、新国王はその遵守を誓約しなければならず、ひとたび誓約すると国王の違背は許されない。1609年の法（*de non praestanda oboedientia*）は、国王がこの宣誓に違背する場合、上院が3回の警告を込めて国王解任の手続きを定めるものである<sup>64)</sup>。

M. ブルゼンスキは著書「ポーランド立憲主義闘争」の中で「ヘンリク諸条項」と「パクタ・コンヴェンタ」について言及し、それはポーランドに憲法上の革新をもたらしたとするが、どの点が革新であるかについて踏み込んでいない<sup>65)</sup>。他方、ポーランド歴史学の権威、N. デイビスは非常に積極的な評価を行なっている。

最初の「社会契約」の登場はイギリス名誉革命での権利請願、権利章典であるとするのが通説である。しかしデイビスの考察では、ポーランドは思想面では世界のどこより2世紀も早く進んでおり、ポーランドの17、18世紀のシュラフタの考えはヨーロッパの19、20世紀の自由民主主義者の考えと一致するとし、双方の一致点は「对国家権力闘争という共通の関心」であるとする<sup>66)</sup>。ポーランドが世界中で最初の対国家権力闘争に勝利して得たものには、「市民の同意に基づく課税」（1374年）、「裁判なしでの財産接收の禁止」（1422年）、「裁判なしでの逮捕の禁止」（1430年）という「法の支配」の確立、個人の自由、合意に基づく統治原則、個人の市民権、宗教の自由、国家権力の専制的行使の阻止、寡頭政治の防止、抵抗権などと並んで市民と政府間の「社会契約」を挙げるのである。さらにイギリスの人身保護令状（1679）と同じく裁判なしに投獄されないとするイェルドニヤの特権（1430）は、結果としてシュラフタに市民的自由を享有させる効能が認められている。デイビスのそうした主張は、共和主義の発達を重視す

---

<sup>64)</sup> Wagner, op. cit., p. 137.

<sup>65)</sup> Mark Brzezinski, op. cit., p. 37.

<sup>66)</sup> N. Davies, op. cit., p. 282-3.



る他の研究者も等しく共有するものである<sup>67)</sup>。それらがパクタ・コンヴェンタとヘンリク諸条項を社会契約と捉える理由であるが、社会契約はイギリスより2世紀早くポーランドに登場するのを知るのである。

ポーランドでは上記のように共和主義思想の高まりの中で国民と政府間の「社会契約」に辿りつくのであるが、ポーランドに漲る思想傾向はポーランド市民のなかにも同じような思想を発酵させている。時系列的には先に登場するゴスリツキの De Optimo Senatore も「社会契約」論をもって一般大衆の人権や自由を擁護するのである。

国王の権限はこの社会契約により狭められる——国王が違背する場合、貴族は国王に対する合法的な抵抗権を行使できる——ことから国王は極端に制限されるばかりでなく、「ニヒル・ノヴィ法」により自由拒否権の乱発により立法議会が機能麻痺をおこすとなると、対シュラフタ関係で下位にたたされる国王は単なるシンボルとしての存在価値しかみえない。そうした政治的一体性を蝕み、無政府状態のような状況を惹起した主なものは、選挙王政制度である<sup>68)</sup>。ポーランドは1569年の「ルブリン合同」から第3次分割で国家が滅ぶ1795年まで、基本的には「規則なき規則の上に在る」状態にあったのである<sup>69)</sup>。

国王は確かに対シュラフタの関係では不利な立場におかれ、法律上シュラフタの議会に服するが、それは2年毎に召集される議会の6週間の開催期間でのことであり、国王は残る98週間、ポーランドの日常の治世につい

---

<sup>67)</sup> Anna Grześkowiak-Krwawicz, op. cit., p. 47.; Jacek Jedruch, op. cit., p. 84.; IC Pogonowski, The First Democracy in Modern Europe, Hippocrene Books, New York, 2010, p. 8.

<sup>68)</sup> Paul Fox, The Poles in America, New York, reprint, 1970. p.36

<sup>69)</sup> Dalibor Roháč, “It is by unrul that Poland stands” institutions and Political Thought in the Polish-Lithuania Republic, The International Review, vol. 13, 2008, pp. 209–24.

て実際の権力を行使するのである。共通の目的実現のために連盟 (confederation) が設けられ、シュラフタの拒否権を封じる上で、連盟を設けて対処するのが唯一有効な方法とされ、中層シュラフタが多い地方議会では成人の男性シュラフタは全員が参加できることから1763年以降この方式で一応成功している<sup>70)</sup>。

### 三. ゴスリツキ De Optimo Senatore 論における基本思想

16世紀ポーランドの宗教と文化の状況 中部ヨーロッパではチェコのプラハ大学 (1347創設)<sup>71)</sup> に次いで古いクラクフ大学 (1364創設)<sup>72)</sup> は人文科学、薬学、法律学の三学部からなっていた。法学での主たる講義が公法であるのは、ポーランドの置かれていた地政学的状況からくる危機を回避するためであった。当時活気があったプラハ大学では哲学科長ヤン・フス (Jan Hus) が1402年、宗教改革の烽火でもあるオックスフォード大学のウィクリフ (John Wycliffe, 1324-1384) の教義をチェコ語に翻訳し講義していた。フスの講義は、神の前では人間はすべて平等であると強調す

---

<sup>70)</sup> Lukowski and Zawadzki, op. cit., p. 91. 「連盟」は市民の抵抗する権利の表現である。結成は個人がグループになってするが、最初のは14世紀初頭、ウイロポロスカ連盟 (1304) が町に寄生する無法者をなくすのに使われた。14世紀後半では国王の死の疑惑を監視するために市民と貴族とで1382～4年に連盟を結成している。15世紀にはマグナートが1439年に結成し、16世紀には既述の1573年「ワルシャワ連盟」がある。18世紀にはロシアの侵略に抵抗すべく結成された1768年「バール連盟」がある。

<sup>71)</sup> Prague University=Charles University in Prague, Retrieved 22 May 1020. <[http://en.wikipedia.org/wiki/Charles\\_University\\_in\\_Prague](http://en.wikipedia.org/wiki/Charles_University_in_Prague)>

<sup>72)</sup> クラクフ大学は正式には「ヤギェウォ大学」。Stanisław Wielgus, Academy of Kraków (University of Krakow, Jagiellonian University), Retrieved 10 May 2009. <[ptta.pl/pef/haslaen/a/academykrakow.pdf](http://ptta.pl/pef/haslaen/a/academykrakow.pdf)>; Jagiellonian University, Retrieved 05 July 2009. <[http://en.wikipedia.org/wiki/Jagiellonian\\_University](http://en.wikipedia.org/wiki/Jagiellonian_University)>

る<sup>73)</sup>。ウィクリフの理論は大学当局が反対するも逆に人気がでるところとなり、フスは1409年大学の学長になる。クラクフ大学の教授陣は、プラハ大で訓練を受けた人々であり、最初の学長スカルビミエシのスタニスワフ (Stanislaw) もその一人である。続いてヴウォツコヴィッツ (Włodkowic) も学長をつとめる。15世紀初期のコンスタンツ公会議 (Constance Council, 1414-18) は最大の関心事、カトリック教会の大分裂 (シスマ, 1378-1417) を解決した後、次の関心事である異端問題については、ウィクリフの教義を異端としその書物は焚書にされ、異端のフスは宥恕を拒んだため火刑に付された。同じく異端と指弾されたポーランド<sup>74)</sup>は、代表トラバ (Mikołaj Traba) 枢機卿とヴウォツコヴィッツが、「すべての人間は異教徒をも含めて自治の権利を有し、平和な状態のもとで生活しかつその領土を有する」という基本理念を述べ、異教徒への宗教的寛容精神を主張し容認されている<sup>75)</sup>。中世ポーランドの「貴族の民主主義」では表現の自由は完全に保障されており、ポーランドは多くの分野でひとり輝く存在であっ

<sup>73)</sup> Jerzy Kloczowski, op. cit., p. 53.

<sup>74)</sup> ドイツのファルケンベルク (Falkenberg) は、ポーランドは異端者と結託してドイツ騎士団と闘うという罪をおかしている故に有罪であり、暴君殺害も国民の集団殺害も正当化され合法であると主張する。ドイツ騎士団とポーランド＝リトアニアは因縁の関係にあり、ポーランドとリトアニアが改宗した後もさまざまな口実をもちいて攻撃をしてきた。それは15世紀初めの「タンネンベルクの戦い」で騎士団が敗れるまで続き、その後も口実を設けては攻撃を行っていた。ジェノサイドなる語は歴史上このとき初めて使われている。

<sup>75)</sup> 公会議は、Norman P. Tanner S. J. (ed.), *Decrees of the Ecumenical Councils*, Vol. 1, に依ると、1415年異端者のウィクリフ (p. 411-6), ヤン・フス (p. 426-32) と弟子ジェローム (p. 433-4) の処分をし、1418年にファルケンベルクの処分はドイツに委ねるとし、ポーランドの主張を容認している (p. 450)。その節のポーランド代表の主張は、20世紀後半に同じポーランド出身のローマ法王ヨハネ・パオロ2世がした国連総会の演説の中に再現されている。Ambassador, Dr. Joseph Cassar, *The Rights of Nations—Reflections on the Address of Pope John Paul II to the 50<sup>th</sup> Session of the United Nations General Assembly*, 1995, p. 9.

た。ポーランドのそうした輝きは、ローマ教会と対立してでも守ろうとする、ポーランド自身の解釈するキリスト教の教義による。異教徒も人間としての権利があるとの思想から発して人間は一人ひとりその信念に対する権利を有するという思想がポーランドでは14世紀以降すでに存在していた<sup>76)</sup>。反三位一体主義を主張し自らをポーリシュ・ブレスレン (Polish Brethren) と称する急進的なソッキニア派の面々も活躍していた<sup>77)</sup>。かれらに共通する理念は「異端に対する寛容」である。公会議でのポーランドの主張は伝統に裏打ちされるものであったのである。

16世紀ポーランドがエラスムス (D. Erasmus) からうけた福音主義的改革思想の影響はとくにエリート層に顕著であった。こうして同時代の3著名人、カトリック司教団をリードした枢機卿ホシウス (S. Hosius, 1504-79)、カルヴィン派の代表ヤン・ラスキ (Jan Laski, 1499-1560)、同じくカルヴィン派で宗教改革者にして政治家であるモジェフスキ (Moderzewski, 1503-72) らもエラスムスの改革思想の影響をうけている。クラクフ大学でのエラスムス思想の学習が15世紀の改革伝統を16世紀にまで引き継いだとされている<sup>78)</sup>。ホシウスのようなカトリックの司祭でさえも影響を受けた例はかなり知られている。反プロテスタントのホシウスは後に枢機卿に任命されるが、かれはプロテスタント各派の全般に反対姿勢をとっていたのであり、反三位一体派だけを弾圧することには批判的であった

---

<sup>76)</sup> Samuel Fiszman, Introduction, in Fiszman(ed.), *The Polish Renaissance*, op. cit., p. xiv.

<sup>77)</sup> 中山昭吉, ポーランド啓蒙思想の系譜, 京都産業大学論集, 第14巻1号, 1984年, 1-33頁。George H. Williams, *Strains in the Christology of the Emerging Polish Brethren*, in Fiszman (ed), *The Polish Renaissance*, op. cit., p. 61.; *Bio Philosophy Humanism Socinian*, Center For Socinian Studies. (retrieved on 2006-09-05)

<sup>78)</sup> Jerzy Kloczowski, op cit., p. 108.

が、結果的にこの派の活動を許していたことになる<sup>79)</sup>。こうして16世紀ポーランドはヨーロッパで宗教的異端者とされる人々の避難所となったのである。

ポーランドの法律学は私法よりも公法において世界に誇るべき特徴を有するが、それを一言で表現するとすれば、「正義は万人の為に！」ということになる<sup>80)</sup>。

ポーランドは、15世紀前半に哲学、法学、神学、天文学で目覚しい進歩があつて世界中から喝采を浴びていたのである。15世紀後半から16世紀前半にかけて留学生とポーランド人学生の比率は半々くらいあり国際的な人氣を博していた。しかしクラクフ大学は16世紀中頃から徐々にではあるが輝きを失っていく。

ゴスリツキは1557年クラクフ大学哲学科に入学するが、クラクフの街は、コペルニクスの活躍していた当時（1491-94）と違い、国際的な知的研究の空気は薄れており、クラクフ大学は田舎の学校に変貌していく。彼は1562年に修士号を修得すると、イタリアの先ずパドバ大学、次いでボローニャへ行き、ボローニャ大学で教会法と市民法を学び博士号を取得する<sup>81)</sup>。ボローニャはルネッサンス期になり法律に対する知的関心がおきると11世紀に「ローマ法の復活」がはじまり、最初の近代的な大学が誕生した街である。そこでの学問の主要科目は法律で、学ぶ法律はユスティニア

---

<sup>79)</sup> 16世紀ヨーロッパの宗教的寛容の歴史を調べてきたルクレールは、カトリック・ポーランドがヨーロッパ諸国で異端視とされていた者たちの避難所になったのは、枢機卿ホシウスのおかげであるとする。Jopseph Lecler, *Histoire de la tolérance au siècle de la Réforme*, 2 vols, Paris, 1955, cited in Jerzy kloczowski, op. cit., p. 94.

<sup>80)</sup> Wenceslas J. Wagner, *Justice For All: Polish Democracy in the Rennaissance Period*, op. cit., p. 127.

<sup>81)</sup> Wagner, Coleman and Haight, op. cit., p. 107.

ヌスの「ローマ法大全」(Corpus Juris Civilis)であった。ボローニャ大学と北部イタリアの諸大学は短期間のうちに西洋世界の法律学中心となり法律を学ぶ者はヨーロッパ中からやってきた<sup>82)</sup>。ポーランドから来たゴスリツキもそうした留学生の一人であったのである。

ゴスリツキの *De Optimo Senatore* はスタニスワフ (Stanislaw) やヴォツコヴィッツ (Włodkovic) の思想の真髄であるとされるが、その刊行がローマではなくヴェニスであった背景には、印刷業者、出版費用、検閲など諸々の面での状況が有利だったからである<sup>83)</sup>。当時35歳の青年ゴスリツキは刊行直後に国王ジグムンド2世アウグスト(位1548-72)治世下の故国へかえり、教会にて奉仕する。著書は国王ジグムンド2世に謹呈されている。その後彼は国王ステファン・バトーリ(位1576-86)と国王ジグムンド3世(位1587-1632)のもとで頭角をあらわし内外において重要な使節、大使を幾度か経験し、さらに聖職者の階層を次つぎと昇り、晩年に宰相その後ポズナニの司教に就いている。3人の国王がゴスリツキに接しての感想は、忠実で高潔な人物、というものである<sup>84)</sup>。そのような評価のゴスリツキの終生の信念は、ワルシャワ連盟の協定にカトリック側から署名した人物であることから知れるように、カトリック教徒以外の異教徒にも人間としての権利を認めるというところに現われている。彼には全部で8本の論文があるが、未刊の *Discursus De Hereticis* では異教徒の権

---

<sup>82)</sup> John Henry Merryman and Rogelio Perez-Perdomo, *The Civil Law Tradition —An Introduction to the Legal Systems of Europe and Latin America—*, Third ed. 2007, Stanford Univ., Press, p. 8.

<sup>83)</sup> ヴェニスでの出版には当時最も優れた印刷業者マヌチウス (Manutius) がゴスリツキの教師ゴルスキ (Gorski) と極めて親しい間柄であり、費用が3分の1で済み、検閲もローマほど厳しくないという事情があった。Wagner, Coleman and Haight, op. cit., p. 107.

<sup>84)</sup> Ibid., p. 108.

利を強く擁護する内容となっている<sup>85)</sup>。エラスムスのヒューマニズムの影響をうけ、生涯その実践に携わった人物というべきである。

ここでゴスリツキの紹介にはいるが、先ず彼の思索の視線がどこに向けられているかを知ることがあり、これを彼の基本思想としてみていきたい。次にそれを支える基本原則があり、筆者の考えでは6つある基本原則について明らかにする。最後に彼の思想のなかに基本的人権と自由の保障が見られるが、それはどのように捉えられているかについて考察する。その概要は、読み進むなかである程度は推察できるにしても、16世紀当時の絶対王政とそれを支える思想状況を考えると余りに過激であることだけは確かである。その革命的なほどの急進的思想のなかで基本的権利と自由の保障がどのように理論構成されているかについて考察する。

### ゴスリツキ De Optimo Senatore における基本思想

ゴスリツキの基本的な信念は、「臣民の個人的幸福にこそ、コモンウェルス的一般のかつ社会全体の幸福がある」<sup>86)</sup>とするものである。それゆえに、「すべての社会の幸福は、その社会の成員である臣民または市民の幸福によって測られるべきである」とする。彼は著書で臣民、市民、一般大衆などの言葉を使用するが、それらはすべて同じ意味として理解する。さらにその幸福が何処に由来するのかについて、「人類一般の幸福は、そして特にすべての社会の幸福は、一つの同じ源に由来する、……人間を幸福にするのは同じ徳 (virtues)」であるとする<sup>87)</sup>。著書の随所にみられる「徳」(virtue)という言葉は、古代ローマの賢人、殊にキケロからポーランド人に引き継いでいる気質であり、そこに含蓄されるのは、慎重分別、正義、勇氣、

<sup>85)</sup> W. J. Stankiewicz, *The Accomplished Senatore of Laurentius Goslicius*, Oficyna Warszawska Abroad, 1946, p. 9, 40.

<sup>86)</sup> Goslicki, *De Optimo Senatore*, (Oldisworth's edition), p. 27.

<sup>87)</sup> Ibid., p. 74.

謙虚であり、これは戦場では勇猛を、議会では慎重さをあらわすが、自由の国における一般市民の徳はかれらを強制的に国家へ奉仕させるのではないので特に重要である<sup>88)</sup>。

ゴスリツキが *De Optimo Senatore* で描くのは、書名から想像されるような理想的な上院議員の姿ではなくて調整者としての現実の上院議員の姿である<sup>89)</sup>。すなわち彼が描写するのは、社会の上層の人間集団とこれらと利害が対立し或いは政治闘争からとり残されている多数の人間集団との中間にあって、双方の調整に努める者についてである。ゴスリツキと同郷で年齢の近い人物にワルシャワ連盟で頭角をあらわし後に宰相になるヤン・ザモイスキ(*Jan Zamoyski*)がいるが、彼はその研究“*De Senatu Romano de Libri Duo*”(1563)でローマ護民官は諸国のあらゆる要求にほぼ満足に応える姿をみたとの結論にいたる。ザモイスキの帰郷後、ゴスリツキは彼の影響を受けてポーランドにローマ護民官に匹敵する役職をもうけようと決意する<sup>90)</sup>。ゴスリツキの前述の否定的反応にもかかわらず、著書を読むうちに実際は上院議員に理想的な調停者像を求めているのではと思われるのである。

中世16世紀ポーランドが国内に調停者を見いだすことは急務であった。国内にあっては当時民衆の激しい突き上げがあっただけでなく「法の執行運動」にみるようにシュラフタ層の内部にも対立があり、自由はしばしば濫用され、動もすれば革命運動にまで発展する危険性があったのである。ゴスリスキは、ポーランドの「黄金の自由」は実は本来の自由ではなく、それを国民に役立たせるには、賢明で巧みな手腕をもちいて上手く施行し

---

<sup>88)</sup> Anna Grześkowiak-Krwawicz, op. cit., p. 46.

<sup>89)</sup> 「自分は理想的な良き上院議員をイメージとするのではない。それは天国でしか見つからず、地上ではその影すらない。」Goslicki, op. cit., p. 3.

<sup>90)</sup> Wagner, Coleman and Haight, op. cit., p. 110.



なければならないと痛感したのである。こうしてゴスリスキが達した結論は、同じシュラフタ層の範疇にありながら富裕なマグナートから成る上院議員の支配に対して貧乏な中下層シュラフタ、一般大衆の反乱を支持することは「可」とするものである。著書はそうした点だけでなく、社会契約、抵抗権や革命の権利にさえ言及するのである。

つぎに人民大衆に自由が与えられる場合、人民大衆の享受する自由とそれの行き過ぎを取り締まる政府は調整の必要性に迫られることになるが、ゴスリツキはその調整をどのように考えていたであろうか。彼は一般市民が流行に左右されやすくまた暴徒化することを戒めていることから、この疑問には意味がある。どのようなタイプの者が国王の暴走を防ぐために壁となり、また他方で暴走する一般大衆をコントロールするのに動くことができるであろうか。これらを総体的に要約すると、国家は自由を施行するため人民大衆の自由と平等をまもりそだてる一方、その自由の管理をどうするかという問題になる。この問題はゴスリツキを悩ませたことであろう。彼はその問題の解決を「上院議員」に見いだすのである。著書のタイトルが「完成された上院議員」なのはそうした理由からであろう。かれら上院議員は、つねに冷静にして沈着であり、党派的抗争を超越した存在として設定され、上院議員の資質には必然的に厳しいものが求められている。国王とシュラフタ層、一般大衆との間に常在してバランスをとるそのスタンスにこそ、ゴスリツキが求めるものがあると考えられる。

ゴスリツキの理解する「上院」について言えば、それは国の統治に関するすべての問題について助言と決定という最高権力を託される議会あるいは集会を指している。この定義によると、上院議員 (senator) は議会に参加するため法的に選出され、統治問題で助言と決定をするため任命される者となる<sup>90)</sup>。その上院議員について詳述する。

---

<sup>90)</sup> Goslicki, *De Optimo Senatore*, (Oldisworth's edition), p. 59-60.

「いろいろな階層の臣民や市民が多数いる中で、良き上院議員ほどに叡智と徳があり、本当に光輝ある人物をみつけることは難しい。……上院議員は、君主と人民の中間にいて双方の完成について専念している。彼はそうした立場にしながら、国王や人民、共和国がそれぞれの場でどのように行動しているか、行政官はどのようにその職責をはたしているか、臣民の法律と自由についてはどのような配慮がなされるか、については容易に知りうるのである。しかしそのバランスが崩れるときには、上院議員はそれに従った手当てを行い、向こう見ずで放縱な人民が混乱と無政府状態に突き進んだり、野心家の君主が暴政や略奪をしようとするときには、それを時宜阻止する。上院議員に求められる必要な資質は、最高度の叡智と思慮である。それに加えて、長年の経験と世界に関する完全な知識である。」<sup>92)</sup>

統治上の balanサーとして権力行使の行き過ぎを抑え、至らざるときは一般大衆の幸福のために奮闘する姿をゴスリツキは望んだのである。「臣民の個人的幸福にこそ、コモンウェルス的一般のかつ社会全体の幸福がある」とする鍵は諸問題のバランスよい解決をはかる上院議員にあることになる。

記者オルズワースの言葉は印象的である。ゴスリツキの時代に政党という制度は存在していなかったが、もし上院議員に代わる制度が新名称で登場していたならば、「ゴスリツキの原則や制度は共和国に蔓延する疫病を防ぐうえで立派な処方箋となっていたらう。」<sup>93)</sup>

---

<sup>92)</sup> Ibid., p. 60-61.

<sup>93)</sup> Ibid., Oldsworth's Dedication.

**ゴスリツキ思想における基本原則** 良き上院議員 (Good senator) に求められる資質は多々あるだろうが、ゴスリツキが話す中で頻繁にでてくるのが「徳」(virtues) の言葉である。これには重要な役割が与えられているのであろう。相当な分量の著書のなかからゴスリツキが訴えようとする原則を選別してみると、それを六つの基本原則のもとで読むことが可能である。

そのあとで最後に、「市民の個人的幸福こそ、社会全体の幸福である」とするならば市民の基本的権利や自由はどのように保障されるべきであると理解されているかを探ってみたいのである。

六つの基本原則はつぎのものである。

- (1) 人間はすべて平等である。
- (2) 人民に民主主義は必要ではあるがそれだけでは充分でなく、国政としては共和制が最善である。
- (3) 社会には、国王も含むすべての者が服従する法が存在しなければならない。
- (4) 法はキリスト教の教義を基礎にして創られなければならない。
- (5) 考え方の対立する場合に備えて調停の制度があるべきである。
- (6) 国家も国民もその本来の目的と威厳はキリスト教の主義に求めなければならない。

以下でそれらに従いそれぞれを概観する。

- (1) 人間はすべて平等である。

ゴスリツキの基本的な思想は、アメリカ独立宣言にあるような「人間は生まれながらに平等である」というフレーズは著書の何処にもないし、そうした直接的な表現もない。しかし実質的には「人間はすべて平等である」というところにある。そうした実質的平等の表現はさまざまな状況のなか

で語られるフレーズを集めて分析して初めてみえてくる。それは例えば、「平等は第一級の徳の一つである」、「法は神の意思であるから、国王も一般大衆もおなじく法に服さなければならない」、「人は法に反して拘束、拷問、死刑に処されない」、「行政官が法に反することを命じる場合、人民はそれに従う義務はない」等というフレーズの中にみることができるのである。

ゴスリツキは平等をどのように捉えるかについて自身の見解を示す。彼の思想の中心をしめる内容からはいると、平等の話はまず「正義」の説明から始まる。これには自然的正義、神的正義と人的正義の三種があるとされ、自然というのは我々の女神であり、女神に従うというのは自然界の創造者である神に従うこととなる<sup>94)</sup>。スコア主義の哲学者はこの自然的正義をもって正義と善をさだめる学問とする。神的正義は造物主である神を礼拝し、恐れ、愛し、尊敬することであり、人的或いは市民的正義は非常に抽象的であり微妙な分野であるので簡単に定義できないとしながらも、「平等ないし公平は第一級の徳の一つである」<sup>95)</sup>とする。事物や人間の価値をどのように判定するかは難しいが、商売の際に利用される数、重量を測定する方法とは別な、それらの真価を合理的に評価する方法によるべきとする。これにより抽象的な「名誉、寛大さ、昇進、職場」の判定も可能となり、社会はその該当者を評価するのである<sup>96)</sup>。平等という原理は、人間の行為、その長所短所や功績を審査する正義の物差しであり、それはまた政府の維持にも貢献する。

しかし正義が欠如すると生ずる事態について彼は憂慮を隠さない。

「賢者、弱者、富者および貧者は、他のあらゆる地位や階層の者ととも

---

<sup>94)</sup> Ibid., 215.

<sup>95)</sup> Ibid., p. 230.

<sup>96)</sup> Ibid., p. 231.

に、同じ公平無私をもってその権利が擁護されなければならない。」  
「不幸を避ける正しいやりかたは、平等という基本的規則をきちんと実施するうえで常に厳格でなければならないことである。これによって国家の安寧が、さらにその構成員と市民の敬愛、善意と愛情が維持されその効果があらわれるのである。この平等という理論原則が無視され、或いはしっかりと考慮されないときは決まって市民に敵意や憎悪、騒動が起こり、その結果政府内にあっては、平等なる者は不平等または上等な国家を、不平等なる者は平等な国家を熱望する主張が横行するのである。」<sup>97)</sup>

(2) 民主主義だけでは充分ではなく、国政としては共和制が最善である。

ギリシャ・ローマ時代からの政治制度の中からゴスリツキは先ず君主制、貴族制、民主主義の三つを挙げてその長所・短所をのべる。君主制は王制でもあり、それは権力をもって代表されるのであり、ちょうど慈父が子に接するように「良き国王は臣民に対しそのように振舞うのである」、しかし「国王が抑制もせず欲望のまま行動してあらゆる法を踏みじめる場合には、直ちに国王の名を喪失し暴君としか呼べなくなる」<sup>98)</sup>として警鐘を発する。

前記三種の政治制度のほかに挙げる専制政治、寡頭政治、暴民支配政治は前記三者と対極の関係にある。すなわち、専制君主は君主制の反対にあり時に暴君として変貌する。寡頭政治は貴族制の対極にあり、暴民支配政治は民主主義即ち人民の政府と対立するものである。

ところで、民主主義国である「人民の国家における唯一の目標は自由で

---

<sup>97)</sup> Ibid., p. 160.

<sup>98)</sup> Ibid., p. 17.

あるが、そこではすべては多数の意思によって管理される。それゆえ数の暴力や危機に遭遇することもある。そうした国では徳や正論は殆ど顧慮されることはない。この種の政府において良い市民とは社会の強化に努める者だけである。彼らの個人生活はけっして正直ではなくその行為にも徳がない。彼らの考えによると、社会的自由の維持こそが政治的徳となるのである。そうした国に共通するのは、あらゆる尊厳は数量により獲得される、すなわち多数派になることが成功なのである。彼らは正義 (justice) を真理や善行でみるのではなく、人民の投票数でみようとするのである。」  
「人々が正しいのは多数者が称賛するからであり、これは民主主義、すなわち人民の国家において往々にして起こることである。」<sup>99)</sup>

そのようにゴスリツキは、民主主義は必要であるが、暴民支配政治の発生する危険性があるゆえに民主主義の存在だけでは不充分であるとし、暴民政治を防止する制度が必要であるとする。

完全な統治形態にとって是非とも必要なものは、彼によると、権威、法と自由の三者である<sup>100)</sup>。ゴスリツキは、その組み合わせにより栄光ある時代を築いた古代ギリシャのスパルタを理想の統治形態とみる。そこでは全ての権力が、国王、貴族からなる元老院、民選長官によって代表される人民の三者にうまく具合に分散されていて、国王は人民を恐れるあまりに専制的になることはないし、人民は元老院を恐れるあまり国王を侮辱することもない。これこそ政治的協調であると言う。

ここでの人民 (people) は、ゴスリツキは狭く捉えていて社会の構成員すべてを指していない。彼の定義する人民は、「市民と臣民の中の生来寛容にして教育で啓蒙されるまともな人間および、法律上招請され昇進する時はいつでも国家の公務に就く資格ある人々」とされ、暴徒、粗野な民、

---

<sup>99)</sup> Ibid., p. 29-30.

<sup>100)</sup> Ibid., p. 33.

野次馬，社会のくず等は排除される<sup>④④</sup>。当時「人民」の意味と範囲はこれに狭義に理解する派と広義に捉える派とがあったが，その相違は究極的には社会の構成員に必要とされる人間の徳（virtue）をシュラフタ層に特有のものとするか，修養により誰でもが修得できるとするかにあると言える<sup>④⑤</sup>。プラトン哲学の支持者であるゴスリツキは民主主義体制に気乗り薄であるが，純粋な貴族社会を信奉しないゴスリツキは，市民的徳と三身分（国王，上院，人民）代表とが共働する「混合共和制」を選択したのである<sup>④⑥</sup>。

シュラフタ層の下層貴族は，人民の代表として諸々の会議に参加しており，そうすることで国王と貴族の双方をそだてる立役者となっている<sup>④⑦</sup>。ゴスリツキは直接人民が社会の中心にあるとの表現はしていないが，もろもろの記述の断片を総合的に眺めるならば思想の基調には混合共和制を採用しながらも人民主権思想を抱いていることが窺われるのである<sup>④⑧</sup>。

「人間の上層界，中層界および下層界の約束事は，本当の政治的協調であって音色が調和しており，社会に共通する善と幸福を堅固なものにする

④④ Ibid., p. 38.

④⑤ ゴスリツキのように職人，農民，商人など徳（virtue）と関係ない者を人民（populus）としないとする考えと，他方で，徳がなければ貴族出身は意味がないとしたり，Warszewicki, De Optimo statu libertatis, 1598. 貴族は血統によるのではなく，その人間の価値にあるとする。Modrzewski, Commentariorum de republica emendanda libre quinque, 1551; Wolan, De libertate Politica sive Civili, 1572. 後者グループは人民を広義に解し，あらゆる階層の人間をもって人民とする。ラテン語の貴族（nobilis）の語源は徳あるゆえ顕著なこと（notabilis）に由来する。Edward Opaliński, op. cit., p. 162-163.

④⑥ Opaliński, ibid., p. 159.

④⑦ Goslicki, De Optimo Senatore, (Oldisworth's edition), p. 53.

④⑧ (1)「人間はすべて平等である」の項を参照。人民主権を示唆する代表的のを挙げると，「王位は国王のためにあるのではない，民衆のためにあるのである」（p. 152）がある。

る。」この古代ギリシャの政治体制と今日われわれが呼ぶところの、「最高の徳ある市民を輩出する共和政体を、われわれは他のどの政治体制よりも好む。そこでは、国王、元老院と人民の三身分がすべての権力をかれらの世話に傾注させるのである。さらに、国王はその行為をとおり善と徳の模範をすべての臣民に示し、かつ上院の助言や顧問によって導かれ、さらにあらゆる点において国の法律を遵守することが望まれる。」<sup>100)</sup>

上院議員には平等という大原則と法の厳格な遵守がぜひとも求められる。これらは正義を実現するための尺度であるからである。その匙かげん如何で社会に混乱をひきおこすのであるから、問題の内容についても人物の価値についても公正なる判断力を持たなければならない。平等や公正は至高の徳なのである<sup>101)</sup>。

ヨーロッパに在る三身分階級の国を引き合いにしてゴスリツキは批評する。フランスには貴族、聖職者、庶民の身分階級があり、国王は公正と正義という規則に従っているので叡智を破ることはなく、危急時には三身分の身分制議会である「三部会」が召集されるというが、国王は「絶対的権力を握っていて彼自身が法である」のでゴスリツキが理想とする社会ではないとする<sup>102)</sup>。スペインでは国王は最高の権力を有するが、貴族が出席しさらに人民の代表である代議員の参列も許される枢密院が頻繁に開かれ、国王は枢密院の審査と決定の下に政治を執り行なう。イギリスについては君主国であるが、国王、貴族選出の議員と人民の代表である庶民で構成される議会と呼ばれる大枢密院がある、と簡単に紹介するにすぎない。ポーランドも身分階級社会である。ポーランドは、国王、貴族と人民の3身分階級からなる政治体制をとっていた。当時人民として理解される

---

<sup>100)</sup> Ibid., p. 35.

<sup>101)</sup> Ibid., p. 230.

<sup>102)</sup> Ibid., p. 50.



のは、下層シュラフタの貴族、騎士とジェントリーとされた。国内には3身分階級からなる堅い結束があり、「それは非常に固いので、国王は上院の助言と許可がなければ政治を為すことができないし、同様にして上院は国王と貴族の同意なければなにもできないのである。」<sup>(100)</sup>

そうしたポーランド共和国にあって国王を含むすべての者が法令に服し、政治は叡智と経験ある上院議員がバランサーとして調整することによりうまく具合になされるとされ、「社会の幸福はその構成員である個人の幸福によって計られる」<sup>(101)</sup> ためここに調整者としての上院の役割をゴスリツキは期待するのである。

(3) 社会には、国王も含むすべての者が服従する法が存在しなければならない。

ゴスリツキは言う。「国王は、国の助言と許可がなければ政治を為すことができない。」<sup>(102)</sup> さらに続けて言う。

「ポーランド国王は政治を行うにあたり、その行為の唯一の指針である法律を作成しなければならない。したがって国王は自分の気分や嗜好で統治することはできないし、上院の助言と同意がなければ宣戦をなし講和をなすこともできない。国王は法令を超え或いは法令が課す限界を超えて行動することもできないのである。」<sup>(103)</sup>

ゴスリツキの時代のポーランド人は、法に対して、また国王と元老院に対してその権威に服してはいたが、なにが事あるときはその超越的な権威

---

<sup>(100)</sup> Ibid., p. 51.

<sup>(101)</sup> Ibid., p. 24, 74.

<sup>(102)</sup> Ibid., p. 51.

<sup>(103)</sup> Ibid., p. 52.

にさえ反対することはできたのである。法の執行運動の一連の流れの中にはそうした例がみられる<sup>113)</sup>。なぜなら法は人民に味方することを正義とするからであり、また人民に認められる自由の保護者だからである。「上院の助言と同意がなければ」国王は為すべがないというフレーズは、ゴスリツキが上院を重視する気持ちの表れである<sup>114)</sup>。現代世界各国の憲法に、例えばアメリカ合衆国憲法に「上院の助言と同意がなければ」というフレーズが採りいれられている<sup>115)</sup>のを想起すると、人民の気持ちを尊ぶ思潮の深さが伝わってくるのである。

法(Law)とは「公共の理性であり、社会の常識である。法を遵守する者は誰でも創造主たる神をも遵守するのである。神は理性そのものであり、宇宙の偉大なるインテリジェンスである。」そうであるから、国王といえども法の下に在って法に服さなければならない。こうして、国王も「行動を通して徳と善の規範を市民に示し、上院の助言によって導かれ、あらゆる面で自国の法令を遵守しなければならない」<sup>116)</sup>とする。したがって「政府は、臣民が……法に畏敬の念を抱く限り安全である。だが、法網にかかるのが貧乏人や弱者だけ、金持ちや強者が畏(わな)をくぐり抜けるというのでは駄目である。」<sup>117)</sup>

---

<sup>113)</sup> シュラフタ層(貴族)にかつて認められていた古い権利の当然の履行を要求して行なわれた運動である。シュラフタ層には裕福な貴族から貧乏な貴族まで相当広範囲にわたるから下層貴族からの要求の突き上げの感がある。運動はジグムント1世と2世の時代(1506-1572)に集中する。Jerzy Lukowski and Hubert Zawadzki, op. cit., p. 71-82.

<sup>114)</sup> Goslicki, *De Optimo Senatore*, (Oldisworth's edition), p. 52.

<sup>115)</sup> アメリカ合衆国憲法第2条2項2には、条約締結と大使任命には「上院の助言と同意を得て」(“with the Advice and Consent of the Senate”)とある。The United States Constitution, Article 2 Section 2, 2.

<sup>116)</sup> Goslicki, *De Optimo Senatore*, (Oldisworth's edition)., p. 35.

<sup>117)</sup> Ibid., p. 241.

法の存在目的はといえば、それは犯罪の処罰のためではなく犯罪の防止のためである。こうして言う。「法律を作成するうえで賢い上院議員が一般に利用する一つの方法がある。それは、犯罪の処罰よりもその防止を目指すことである。こうすることですべての市民を犯罪の機会から遠ざけるのである。」<sup>(119)</sup>

また裁判官について言及する。裁判官は人民を管理し人民に正しきことを指示する義務を負うのであるから、キケロの言葉を引用して「法は裁判官よりもかなり上位にあり、裁判官は人民の上にある」とし、さらに「裁判官は法を話すか、法は沈黙した裁判官である、とは良い表現である」<sup>(120)</sup>としつつ当然ながら裁判官も法に従うことを明らかにする。

法秩序はゴスリツキにとってすべての国家に必要な要素だったのである。

他方、現代のポーランドの慣習にみられないものが中世においては行われていた。それはポーランド式の宣誓 oath の仕方である。ポーランドでは政府の役人はすべて法律を維持し遵守し、自由を守るために厳かに宣誓するとされる。「この宣誓は、ポーランド語で“頭の覆い”の意味の Captur と呼ばれる。宣誓は、すべての階層（国王、貴族、人民）に相互に行われており、そのことにより彼らは法律の遵守と国家の自由の維持とを約束するのである。“頭の覆い”は霜、雪、暴風雨などのあらゆる攻撃から頭脳をまもるのであるから、この宣誓は、法律、自由及び幸福へのあらゆる攻撃から社会をまもる確実な防御の覆いなのである。」<sup>(121)</sup>

そのようにゴスリツキの「法の支配」思想に接すると、それは統治する側の国王も統治される側の人民もともに法に従うというのであるが、これ

---

<sup>(119)</sup> Ibid., p. 175.

<sup>(120)</sup> Ibid., p. 54.

<sup>(121)</sup> Ibid., p. 51.

はルネサンス期の政治学者 A. F. モジェフスキの理念と同じである<sup>(121)</sup>。この理念はまたアメリカの統治概念にも通じるのである。

(4) 法はキリスト教の教義を基礎にして創られなければならない。

ゴスリツキは、法制度は、統治者の意思にもとづいて作られるべきではなく自然の広範なる原則にもとづいて構成されるべきである、と考える。

「自然的正義 (natural justice) は自然から生ずる最初の原則と指示にその起源を有する。それは我々に明かりを灯し、それにより我々は事の善悪を判断する。これは衡平法の偉大なところである。我々はあらゆる不正を避けなければならないのであるから、他人を傷つけたり不快にさせたりしようと考えてはならない。人類に対するお互いの慈愛、善意こそが最高にして基本的な徳である。これによって人間は互いに引き寄せあい、そして一つの共通する社会、公的社会として団結するのである。」<sup>(122)</sup>

しかしゴスリツキは自然的正義だけをもって法の制度を構築できるとは考えておらず、その他に「神の正義」(divine justice)をも借りなければならないとする。

「神の正義、あるいは造物主の正義は、造物主がわれわれに与えた義務であり、これには、知識をつけること、礼拝をすること、愛情をもつこと、造物主を崇めることである。これは人間にとっては義務であると同時に特権でもあるのだ。なぜならば、あらゆる生き物を創るうえで、造物主は神の観念を人間の心中だけに移植するように取り計らっ

---

<sup>(121)</sup> Waldemar Voise, Polish Renaissance Political Theory: Andrzej Frycz Modrzewski, in Fiszman (ed.) The Polish Renaissance op. cit., p. 174.

<sup>(122)</sup> Goslicki, De Optimo Senatore, (Oldisworth's edition) p. 215.

てくださったからである。だから我々人間は神を尊敬するが、われわれの下にある動物は地上を飽くことなく歩きまわり至るところで草を食糧としている。それゆえ人間はあらゆる動物の中で、礼拝するという名誉ある役目を造物主から授けた唯一の存在なのである。こうしてわれわれは造物主に畏敬の念をいだき、その名に当然の栄光をささげるのである。」<sup>(123)</sup>

ゴスリツキがキリスト教の信仰を基礎にして法の体系を考えていることは次の一節からも明らかである。

「われわれは要するに造物主と連携しており、ほとんど造物主と縁続きであるから、われわれは現世をわが社会とみなすべきである。この社会は権利を命ずるのであり、造物主が我々に約束してくださった政府をもつのである。また、その御方は万物の創造主であり、同時に宇宙の設計者でもある。原点である偉大な造物主から、他の総てのものは生ずるのである。こうした理由で、われわれは造物主に頼らなければならないのだ。と言うのは、いかに弁護人や法律や勅令が世界の良き政府にとって必要であろうとも、その御方の創造物である世界の知識は人間の意思によって管理されるのではなくて、永遠の造物主の命令と叡智によって管理されるのである。したがって造物主の善意と意思に依るのである。」<sup>(124)</sup>

そうであるからこそ、「法は公共の理性であり、社会の常識である。それゆえ法を守る人は誰でも同時に造物主にも従うことになるのであり、それは何故かといえば、神は理性そのものであり、宇宙の最大のインテリジェンスであるからである。」<sup>(125)</sup> それゆえに人間界では一般大衆のみならず国王

---

<sup>(123)</sup> Ibid., p. 217.

<sup>(124)</sup> Ibid., p. 56.

<sup>(125)</sup> ibid., p. 35.

といえども法の世界に服さねばならないことになるのである。

- (5) 国王と人民の見解の相違は、調整者により解決されなければならない。  
い。

ゴスリツキは調整者としての上院を重視する立場をとる。まず「上院」とは共和国政府のあらゆる問題で最高の諮問と決定の権を授けられている議会のことであるとし、それゆえに「上院議員」は政府の問題について諮問し決定するべく任命され、議会に法的に選出される臣民ないし市民であるとする<sup>(126)</sup>。その上院がなぜ重要な存在であるかについては、つぎのパラグラフに明らかである。

「国王と人民の間での緊張状態や争いごとは頻繁に生ずるが、その際一方が前へ前へと進んでより多くの権力を目指そうとするならば、他方は退却する余り行過ぎた自由の状態になる。こうした論争は、過度に熱をおびて暴力的な心情でおこなわれると、政府を頻繁に痛々しいほどに苦しめるのである。そうした闘争の争点とその結論は共通している。すなわち、国王が人民より優勢になる場合には、暴君となり、人民が成功する場合には多数の頭（かしら）と指導者がいることから多くの暴君の誕生をみることになる。」<sup>(127)</sup>

多数の暴君の権力の場合は、唯一人の人間の権力よりも我慢できないものとなる。暴君一人の場合は死をもって終わらせることができるが、暴君多数の場合それは飽くことなく傲慢な言動が増大するからであるというのである。

それゆえに国王と人民の中間にあって揉め事が極端になるのを防ぐために両者の仲裁をする存在が必要になる。ゴスリツキは言う、それこそが

---

<sup>(126)</sup> ibid., p. 59-60.

<sup>(127)</sup> ibid., p. 149.

「良き上院議員」である。

「上院議員は、王の特権、権威および支配権並びに臣民の権利と自由について本当の法的限界を決めることのできる知識が必要である。」<sup>⑫</sup> また上院議員は国王については、「上院議員の義務として、国王の職務、その権限の性質、限界および範囲については狭く求めなければならない。彼が認識すべきことは、王位は国王のためではなく人民のためにある、ということである。すなわち会議の約束事として、上院議員はどのような私的な利益よりも共同の利益を優先しなければならないのである。こうして彼らは法のもとで支配をおこない、政府は人民の権利と自由が維持され守られることを計画するのである。」<sup>⑬</sup>

そうした基調のもとで更に続ける。

「そうした悪弊防止のため、上院議員は細心の注意をはらいまた最善の努力をつくして、秩序ある法治国における臣民の正真正銘の自由の擁護に介入すべきである。その自由というのは法治国においては国家のすべての構成員が共通して保持するものである。中間的な位置から、そこが上院議員の占める適切な場所なのであるが、彼は絶えず警戒しながら見廻し、一般民衆の福祉に注意深く目を向けていて、もしかして、多くの権力を求めるごく少数者の野心、あるいは多くの自由を求める多数者の煽動により曝されるあらゆる危険から共和国をまもるために最大限の注意を注ぐべきである。その理由は、上院議員は、適切な立場にありまたその職務の性質からも、静寂と平和対暴力と無秩序の間の、自由と苦役の間の、また国王と人民の間の本当の審判官

---

<sup>⑫</sup> ibid., p. 149.

<sup>⑬</sup> ibid., p. 152.

であり仲裁人だからなのである。」<sup>(130)</sup>

ゴスリツキが如何に調整者たる上院議員を重視するか、その理由を知ることができたが、彼はその任に就く者は幾つかの基本的な資質を備えなければならないとする。彼はそれを挙げる。第一に調整者たる良き上院議員は、「一般大衆の福祉の増進をはかるという、特別な徳を備えなければならない。」<sup>(131)</sup> 第二に良き上院議員は「感情で歪められたり、或いは欲求で誘惑されてはならない。」大多数の人間は、若さや経験不足により或いは環境の変化や生活の乱れにより、往々にして人間の路を踏み外すが、そうならないために「良識、理性、知恵、助言および判断力をはたらかせるように老熟する」<sup>(132)</sup> ことが必要である。第三は、「高度の叡智、思慮分別と永年の経験であり、さらに世界についての完全な知識」である<sup>(133)</sup>。第四は、上院議員の宗教的判断と心情が安定していることであり、かつそれが確認されなければならない。「なぜならば宗教上の貞節は、真の叡智、徳および名誉の基礎だからである。」<sup>(134)</sup> 第五に国家の上級職に就く者は、「一般大衆の福祉の増進に努めるという特別な徳」を備えていなければならない。彼らは、自分を雇う「政府を誠実に愛し、その下での静穏な生活を望み、古き良き支配階層をこわすような変更、改修を一切してはならない。」<sup>(135)</sup> 第六に上院議員は、「一般大衆から託される権力と信託を、かれらへの奉仕と公益のためだけに使うべきであり、それ以外に使ってはいけない。」<sup>(136)</sup> 彼が注意を向

---

<sup>(130)</sup> ibid., p. 150.

<sup>(131)</sup> ibid., p. 55.

<sup>(132)</sup> ibid., p. 60

<sup>(133)</sup> ibid., p. 61

<sup>(134)</sup> ibid., p. 224.

<sup>(135)</sup> ibid., p. 55-56.

<sup>(136)</sup> ibid., p. 56.



なければならないのは、「ただ一つの家族や人間ではなくて、共和国なのである。」祖国は「上院議員におびただしい数の人間の統治を委ねたのである。かれらの胸中、意見、好みは大きく異なり、しばしば対立するかれら人間の統治を委ねたのである。だから上院議員の監督の下に一つの調和ある国家にそだてて団結しなければならないのである。」<sup>(177)</sup>

ところで国家の構造の説明をするのに、ゴスリツキは人体の構造を例にとって解説する。「頭部と心臓の分離はたちまち死をもたらす」と同じように、国家においても「国王と上院の分離はそれ相応に危険である。分離したならば、市民の不安、あつれき、混乱が生じてきて、政府の転覆や破滅はいとも簡単に起こるであろう。」<sup>(178)</sup> それゆえにゴスリツキは国王と上院の密接な協力と両者の結束の大切さを訴えて言う。

「国王は、上院の指導のもとに大きな身体の叡智を結集し、その規則と指図に則り施政するのであるから、理由、協議および規律において全く完璧でなければならず、さらに自分の指揮する諸々の多数の人民よりもはるかに優れていなければならない。そうした君主は賢明にかつ至高の思慮をもって統治せざるをえないのである。なぜならば、国王はしばしば移り気になり誤った方へ向かう自分の意見ではなく、上院の共通理性と一体化した助言に頼ることになるからである。こうすることで自分の意見は完全なものになる。」<sup>(179)</sup>

ゴスリツキは著書を国王ジグムント 2 世に謹呈するが、それはポーランドが良き上院議員により運営される理想の国に写ったからであろう。彼は

---

<sup>(177)</sup> ibid.

<sup>(178)</sup> ibid., 36.

<sup>(179)</sup> ibid., p. 37.

国王に次のような讃辞を送る。

「国王は幸福である。即ち、上院が輔佐することで為される、国王の希望と指示の下での賢明で思慮ある政治があるからである。……国王の中庸と叡智により、わが国は平和と静穏を、さらに最高の名声をえているのである。」<sup>(40)</sup>

また次のようにも述べる。

「市民が平穏のうちに生涯をおくれる国家はまことに幸福である。他方、市民が平安や幸福に確たる保証のない国家は悲惨である。どのような政府でも人民が自国に関与しないならば、それは幸福でも悲惨でもない。」<sup>(41)</sup>

しかしポーランドは幸福の国であると判断するゴスリツキはそこで国王に讃辞をおくる。

「ポーランド国民がしばらく享受した平穏と幸福はまことに国王に依るのである。」<sup>(42)</sup>

(6) 国家と国民はその本質的な目的についてはそれをキリスト教の原理に求めなければならない、さもないと国家は滅ぶことになる。

ゴスリツキは、動物界の中で人間だけが神から特殊な能力、「神の信仰」を授かったとするのは既述したが、さらに次のようにも述べる。人間は諸々の動物の住む「世界の住民に任命されただけでなく、その君主であり主人公でもあるのだ。」<sup>(43)</sup> こうして動物界の住民となる人間は必然的に神の信仰に導かれる存在となる。

---

<sup>(40)</sup> ibid., xxix.

<sup>(41)</sup> ibid., xxvii.

<sup>(42)</sup> ibid., xxviii.

<sup>(43)</sup> Ibid., p. 4.

「人間は、天上界と地上界の双方における唯一最高の支配者である神から直に広範な威厳を授けられている。すなわち神は、人間を人間界における共通の仲間にし、天空の仲間との通信を可能にするために地上界の政治の仲間にしたのである。それに応じて神は人間に神の心と知力を吹き込み、人間は慎重、高潔および公平性ある神のような遣り方で世界を治めることができるようにするのである。人間には神との社会的交流と通信が存在するが、これは人間の理性と知力のなかに見いだされる。それが完成すると、人間は造物主に酷似するまでになる。」<sup>(44)</sup>

人間が神から授けられた知力をもって政治をおこなうのは良いことであるが、もしも神の力のない状態で政治をおこなうとすればどのような結果を迎えるであろうか。ゴスリツキはいう、天空から人間界に撒かれた種を農夫が手入れよく育てると果実をもたらすが、「しかしそれが蔑ろにされ或いは奪われる場合には、それは不毛の地において枯れてしまうか、果実の代わりに棘や荊を結ぶであろう。」<sup>(45)</sup>

キリスト教の教えは人間界を救うとするのがゴスリツキの基本であるが、この思想は個々人に妥当するだけでなく、国家にも妥当すると理解されている。「法律も行政官もない処では人間社会の姿形があるはずがない。そうした国は神にも人間にも見捨てられたとみなされるのである。」<sup>(46)</sup>

#### 四. ゴスリスキ思想における基本的人権と自由の保障

以上ゴスリツキの大著 De Optimo Senatore 論に付き合ってその内容を

---

<sup>(44)</sup> Ibid., p. 5.

<sup>(45)</sup> Ibid., p. 5.

<sup>(46)</sup> Ibid., p. 55.

吟味してきた。そこでは我われは、ゴスリツキが表現に抑制を加えることなく自身の考えを披瀝するのを知るのである。かれは幾つものフレーズをあちこちに分散させているが、それらを総合的に捉えると「人民は『実質上』平等である」と表現するのである。

彼はそこでは、弱い立場の人々を如何にして守り、そして幸福にすることができるか、について真摯に考える。かれら一般大衆に幸福が授けられるために基本的人権や自由が認められるべきことは述べられているが、それがどのようにして保障されるかについて検証する必要がある。

### ゴスリツキの世界観「市民に幸福を！」

ゴスリツキの世界は、国内の弱い立場にある一般大衆に対して暖かい眼差しの向けられた世界である<sup>(147)</sup>。その思いは、「臣民の個人的幸福にこそ、共和国の一般的かつ社会全体の幸福がある」<sup>(148)</sup>のフレーズに凝縮して代表される。市民の幸福をねがう思いはどこに由来するのか。それは絶対的真理とされる造物主の意思に由来するのであるが、これを仔細に眺めるならば、「人類に対する互いの慈愛、善意が基本であり最高の美德とする『正義』」から流出するのであり、これに依拠することによって人間は互いに引き寄せあって社会を結成しお互いに団結するのである<sup>(149)</sup>。これはキリスト教（カトリック）の教義では自然のことである。さらに正義が介在することで人間は造物主と縁続きになり、人間は造物主の約束する政府をつくるのであるが、この政府は造物主の命令と叡智により管理されるものとなる<sup>(150)</sup>。すなわち神の命令と叡智の下に置かれるのである。

---

(147) Ibid., p. 215.

(148) Ibid., p. 27.

(149) Ibid., p. 215.

(150) Ibid., p. 5.

**政党の役目を果たす上院議員** 国家を統治する制度はいくつかあるが、それらを比較検討した結果、国王、元老院と人民の3身分からなる共和制が最善のものとして推薦される。ここでの人民はポーランド史では実際にはシュラフタ層であったから、共和制は人口の僅か10—14%の貴族が中心であった<sup>(51)</sup>。他方、理想の世界をめざすゴスリツキは人民の範疇をシュラフタ以外にも広げて一般大衆をも包摂する考えを婉曲的ではあるが肯定的にしようとしていた。

政党政治の存在しなかった当時、統治者である国王と被治者である一般大衆の間にあって、政党の役割を果たしていたと考えられるのが上院議員であった。国王は国を治めるにしても、国民に政治行為をするにしても上院の議員の助言と許可がなければ、為すすべが無かったからである。そこで、国王に助言と許可を与える側の上院議員は、その資質として「一般大衆の福祉を増進するという特別な徳」を備えねばならない<sup>(52)</sup>とされ、かれらは絶えず諸原則を念頭に入れておかねばならないことになる。その諸原則とは例えば、「平等なる大原則と法の精神とを順守すること」<sup>(53)</sup>、「国王の特権、威厳および支配権に法的限界を設定すること」、「王位は国王の為にあるのではなく一般人民の為にあるということ」、「いかなる私的な利益よりも社会全体の公的な利益を優先しなければならないこと」<sup>(54)</sup>、等等である。De Optimo Senatore には、アメリカ独立宣言やフランス人権宣言にあるような「人間は平等に生まれている」という直接表現はないが、既述のように言外にそれと同じことを表現していると思われる。それは擬置き、上院議員に求められる資質は一般大衆の利益を擁護する為のゴスリ

<sup>(51)</sup> Wenceslas Wagner, Introduction, in Wagner (ed.), Polish Law Throughout the Ages, op. cit., p. 5.

<sup>(52)</sup> Goslicki, De Optimo Senatore, (Oldisworth's edition) p. 55.

<sup>(53)</sup> Ibid., p. 230.

<sup>(54)</sup> Ibid., p. 152.

ツキの強い願望なのである。

共和主義においては人民が国家の中心になるが、民主主義の下で彼らに政治に参加する権利を全面的に認めるとなれば「多数イコール正義」との錯覚のもとで暴民政治のおこる危険性があると危惧するゴスリツキは参政権を上院議員に委ね、一般大衆には政治の果実を享受する方法を選ぶのである。こうして、国王には全体を指揮する権を、上院には国王に勧告する権を与えておき、一般大衆は統治の客体になるだけであるが、しかしゴスリツキは政治の果実を与えられる彼らが政治の犠牲となることのないように、上院議員には前述の諸原則のもとで厳しい縛りが掛けられており、国王にも彼らの利益が守られるよう注視する義務を負わされている。国王は、「叡智と勧告の偉大なる執行者、法律の擁護者、正義と衡平の決定者であり、人民に共有する自由の保護者」として位置付けられる<sup>(155)</sup>。一般市民の保護はそうにより法によって堅持される。

暴君政治はゴスリツキが最も恐れるものである。これは、国王が抑制なしに欲望のまま行動し法を侵犯する場合にもおこるし、一般大衆が多数の意思をもって国王に暴力的心情で対決する場合にも大衆側にリーダーの数だけ暴君がうまれる。これを怖れるゴスリツキは、一般大衆については、彼らに代わって政治に参与する上院議員が彼らの要求を吸いあげて調節する作用弁にするのが最善とする。上院議員の行なっていた役割は、政党が存在するならば、確実に政党がおこなう筈のものである。

神の理性である法に総ての者は服さなければならない 国家を治めるのに法が必要であることは言を俟たない。社会が法秩序によって安定することはゴスリツキも認める。ところで法の出どころについて、彼は人間の

---

(155) Ibid., p. 153.

意思の重要性を認めつつも法は人間の意思を超越する造物主に由来すると考える。なぜなら人間界は造物主と連携しており、すべてのものは造物主から生まれるからである。世界の知識は宇宙のインテリジェンスをもつ造物主からもたらされ、その管理は造物主の命令と叡智による<sup>(55)</sup>。こうして、「法は神の理性である」という真理が導き出され、神の理性の下にある国王をも含むすべての者は法に服さなければならないのである<sup>(56)</sup>。

社会にあって『平等』は第一級の徳である」とされる<sup>(57)</sup>ことから、平等という基本原則がきちんと守られている限り国民の幸福が守られ国家の安寧も保障されるが、その原則が無視されるときには国民の間に憎悪や紛争がまきおこり不安な状況を招くことになる<sup>(58)</sup>。したがって国王が人民の先頭にたって徳と善を垂範し、法を遵守するのは当然である<sup>(59)</sup>。

人民大衆と政府間の「社会契約」　ゴスリスキは人民大衆には基本的権利や自由の保障がなければならないとするが、人民の基本的権利や自由がどのようなものであるかは、上院議員が人民の権利と自由になるべく関心を寄せていなければならないとし、「人民は富者も貧者も、貴族も庶民もまったく同様に扱わなければならない、彼らはまったく平等である」と力説する流れのなかで、その一端が浮かび上がってくる。

「人民は行政官のあらゆる職種に就くことができる。人民はすべての法律の作成と改訂に干渉する権利を有する。人民はすべての法令の採択に関して、その生命、自由ないし財産の関わる問題の採択に関して投票権を有する。人民は法に反して逮捕、拘禁、投獄、束縛、拷問さ

---

<sup>(55)</sup> Ibid., p. 5.

<sup>(56)</sup> Ibid., p. 35.

<sup>(57)</sup> Ibid., p. 230.

<sup>(58)</sup> Ibid., p. 160.

<sup>(59)</sup> Ibid., p. 35.

れることはない。人民はその財産を不当に充分な理由もなしに剥奪されることはない。人民には然るべき理由ある場合を除いて、いかなる課税もされることはない。行政官が法に反することを命じる場合には、人民はそれに従う義務はない。そのような場合、人民は行政官に注意をうながし、彼の行為に抗議する権利を有する。人民は権力ある者により抑圧されたり損害を受けたりしてはならない。人民は、法と衡平により抑制される場合を除いて、自由に考えかつ行動する。人民は自国の自由と法律を守るために暴君に反対する権利を有する。人民はあらゆる議会において議席を持ちその議会に参加する権利を有する。」<sup>(66)</sup>

そうした基本的権利や自由を人民に認める政治原則において、ゴスリスキは、上層界、中層界と下層界の人間の同意が政治的安定をもたらすとして、「三権の分立」は必要であると考え<sup>(67)</sup>。こうして国王には全体としての指揮権があり、政府であるかのごとき上院には勸告権が全面的にあることになる。あらゆる会議の頂点にある上院で決定することが全ての階層により遵守される場合、政府は良い政府になる。また平等という規則が臣民により守られる場合、人民は礼節をたしなみ、国王は心がけて権力の行使にあたり、上院は助言の権を享受する。とりわけ法律はあらゆる場合にあらゆる場所で整然と施行され遵守される場合には、そうすべきとの一般的な合意が成立するとする。そこでは国王と上院は政治をおこなう政府機関として一体のものと考えられる。

ゴスリスキの考える人民の基本的権利や自由は、アメリカ独立宣言(1776)やフランス人権宣言(1789)にみられる天賦人権説と類似する内

---

<sup>(66)</sup> Ibid., p. 163-4.

<sup>(67)</sup> Ibid., p. 34 and 56.



容をもつ。ゴスリスキを注意して読むならば、基本的権利は造物主が人間に政府を約束した時点であたえられているのが知れる。政府や国家により与えられる権利ではないのである。しかも唯付与されるのではなく、それらの管理・履行を上院議員に全面的に委託しているのである。ここに社会契約の思想がみえる。「上院議員は一般大衆から託される権力又は信託を、彼らへの奉仕と公益のためにだけ行使すべきであり、それ以外の行使はしてはいけない (They look upon the Power or Trust which is reposed in them by the People, to be intended for no other use or purpose, but to be employed in their service, and for the common good.)」, また「祖国は上院議員におびたしい人間の統治を任せたのである (his Country has entrusted him with the Government of Vast Multitudes)」<sup>(66)</sup>と(強調は筆者)。この意味するところは、一般大衆は上院議員に人民の幸福になる権利、基本的権利や自由の実現を委託するのであり、これによって一般大衆が、延いては社会が幸福という利益をうける、つまり、「すべての社会の幸福は、その社会の成員である臣民または市民の幸福によって測られるべきである」<sup>(67)</sup>というのである。市民の幸福を為政者に託する以上、為政者はその行動について責任を負うとする有責性の原理は当然そこに包含されている。

そうしたことは信託 (trust) の観念に基づく行為と同じである。信託関係が成立するためには、委託者、受託者と受益者が必要であるが<sup>(68)</sup>、ここでは、一般大衆が委託者、上院議員が受託者 (上院議員の助言により政治をおこなう国王も受託者と考えられる)、一般大衆と社会が受益者としての役割を果たしているとするのが可能である。信託の観念は13世紀中期に

---

<sup>(66)</sup> Ibid., p. 56.

<sup>(67)</sup> Ibid., p. 27.

<sup>(68)</sup> 新法律学辞典、有斐閣。

イギリスで財産管理に関して生まれるが、20世紀には国際連盟と国際連合で未発達な地域住民の福祉と発達を図ることを至上原則として守ることが「神聖なる信託」とされるなど財産関係以外においても利用されている。ポーランド法の発達には私法より公法の分野で優れており、10世紀～14世紀に「後見」の観念は生まれている<sup>(66)</sup>ものの、ゴスリツキの生きた16世紀に信託概念が存在したかは不明であるが、当時西ヨーロッパでは法律学で最先端にあるボローニャ大学で法律学を学んでいる以上、論説に信託の観念がでてきても不思議ではない。信託の観念によると、それが然るべく履行されない場合、委託者である人民は信託違反を理由として上院議員および国王に反抗する権利を当然認められるのである。

受託者に履行懈怠、違反などのある場合、彼らに反抗、抵抗する権利は当然容認されている。

「為政者が法に反することを命じる場合、人民はそれに従う義務はない」、その場合「人民は為政者に注意をうながし、彼の行為に抗議する権利を有する」、「人民は自国の自由と法律を守るために暴君に反対する権利を有する。」(強調は筆者)<sup>(67)</sup>

これは悪政への反抗、抵抗を擁護する権利である。さらに進んで、

「ときに人民は、国王の暴政と略奪に激怒して自らの自由を守るといふ明白な権利を行使する。こうして十分に謀議を凝らすか或いはまた公然と武器をとって、服従の束縛から脱却し、領主や支配者を追放し、ついに政府を完全に自分たちの掌中に収めるのである。」(強調は筆者)<sup>(68)</sup>

---

(66) W. Wasiutyński, *Origins of Polish Law, Tenth to fourteenth Centuries*, in Wenceslas Wagner (ed.), *Polish Law throughout the ages*, p. 53.

(67) Goslicki, *De Optimo Senatore*, (Oldisworth's edition). p. 164.

(68) *Ibid.*, pp. 32-33.

ということになると、これは要するに為政者に信託した人民の幸福追求権が履行不能によりそれが適わない場合には、人民は武力をとってでも為政者を追放して自らの政府を創設せよ、とここで歴史上初めて革命に対する権利の主張がなされる。ある研究者はこのフレーズだけから革命権を云々するが<sup>⑧</sup>、ゴスリツキの本音は、一般大衆が統治行政に関する信託が彼らのために行使される限り問題はないが、彼らの利益にならない場合に初めて革命権が許されるとして信託という枠組みの中で捉えるところにある、と考えるのが自然な解釈である。

以上の論調はヨーロッパ絶対王政の続く16世紀中期に為されたものである。それを念頭におくとわれわれはゴスリツキの主張の過激さにただ驚愕するばかりである。

ここで彼の考えを要約するならば以下のものであろう。人民の基本的権利、自由などを盛り込んだ幸福追求権の履行が不可能になる場合には、信託の関係を損なうものとして、人民は為政者たる国王に反抗し抵抗する権利を有するが、さらに国王が暴政をおこなうまでに至る場合には革命を起こしてでも政府を転覆させて新政府を設立する権利があるとする。こうした思想は冒頭でも述べたように、17世紀イギリスのピューリタン革命において共和革命派に精神的な栄養剤となっていて、彼らは檄文を貼りだして革命を行っていたのである。

### 爾後にみられるゴスリツキの影響

イギリスではエリザベス女王亡き後、スチュアート朝のチャールズ1世（位1625-49）、チャールズ2世（位1660-85）時代に絶対王政下の抑圧を逃れるピューリタンの一団が植民地アメリカにわたっている。王位排斥運動（後のジェームズ2世）の危機時期（1678-81）、王政を支持する保守トー

---

⑧ これは、「最初期の革命権の政治論文」である。Filipowicz, op cit., p. 238.

リー派 (Tory) とそれに反対する急進ホイッグ派 (Whig) がうまれ対立していた。王党派はフィルマー (1588-1653) の「家父長制論」(Patriarcha) で王権神授説という武器を手にする。フィルマーが最も攻撃する相手は、人間の原初的形態を「多数者の平等」とする R. ベラミーノ (Bellarmino, 1542-1621) と、「すべての人間は平等に生まれている」「それゆえ誰も他人への所有権がないと同様、他人への政治的権限を持たない」とする F. スアレス (Suárez, 1548-1617) である。どちらもカトリックのイエズス会神学者である。彼らの「自然的自由と平等」と「政府は契約の所産」の二点がフィルマーから忌避されたのである。他方、ホイッグ派のシドニー、ロック、ティレルの面々が反論の声をあげることになる。

ピューリタン革命を制した共和制のクロムウェル (位1649-58) は、ポーランドの法律には興味を示したが、評判のゴスリツキ英版には、翻訳者の改竄で選挙君主制や宗教改革に関する箇所が欠落しており関心を示さなかったとされる<sup>(70)</sup>。

政治的、宗教的な環境が比較的に自由であったポーランドからのアメリカ移民は、17世紀中期のソッキニア派の禁教と同後期の国家消滅を契機に急増する<sup>(71)</sup>。18世紀早々にスコットランド、アイルランドからやってくる

---

(70) Richard Butterwick, *Poland's Last King and English Culture: Stanislaw August Poniatowski, 1732-1798*, Oxford Univ. Press, 1988, p. 31. クロムウェルは直接ゴスリツキの影響に触れなかったが、シドニーから共和主義思想を受容れている。Alan Graig Houston, *Algernon Sidney and the Republican Heritage in England and America*, Princeton Univ. Press, 1991, p. 225.

(71) ポーランドからの移民は、4期中2期目の政治移民時代 (1776-1865) に大量発生する。1795年にポーランド国家が消滅したからである。殆どは母国防衛に参加の軍人、下・中層貴族、教員、音楽家などインテリであるが、中でも顕著なのは米独立運動参加のため1776年渡米のコシュージコ (T. Kosciuszko), 79年のプラスキ (C. Plaski) である。前者は米独立後、年金、土地、市民権を付与され、ワシントン将軍に慰留されるも祖国独立運動のため1798年帰国。T. 7

新教徒の移民はホイッグ派であり植民地に影響をあたえる人々である。

イギリスとアメリカにおけるホイッグ思想      イギリスのホイッグ思想はフィルマーを否定する。王位排斥運動当時にかかれるホイッグ派のティレル、シドニー、ロックの主張はその後の流れを代表するものであるが、それぞれの背景の違いからその帰結は大きな隔たりをみせることになる<sup>179</sup>。

J. ティレル (Tyrrell, 1642-1718) は、基本知識をプーフェンドルフに頼っており、永年の伝統、習慣、自然法上の義務といった諸要素をブレンドした社会契約を構想する。したがってこのホイッグ派は、政治的自由と市民秩序はバランスのとれた諸制度によってのみ確保されるとし、過激な人民主権原理、政府を崩壊させる原理、革命権などを拒否する。ティレルの穏健なウィッグ思想は最終的には王権神授派の人々をも吸収するまでになり、伝統を重んずるイギリスにおいてのみ通用する。かれらは議会主権を支持し、独立当時のアメリカ・ホイッグと同志であっても別々の価値観を持っていたのである。

独立当時もてはやされたシドニーは、聖書の寓話を批判的に用いることで社会契約論を構築する<sup>180</sup>。能力や徳育の違いによる人間不平等は甘受す

---

↘ ジェファークソンと友人であるコシュエシコは帰国に際し、黒人に自分の土地を利用させ、自由を与えてよき隣人になるよう依頼している。A. Boherg and R. Wroblewski, Part 2: Polish Immigration to the United States, in Polish American (ed.), HJ Maciuszko, Polish American, 2002, p. 79-90.

<sup>179</sup> Lee Ward, *The Politics of Liberty in England and Revolutionary America*, Cambridge Univ. Press, 2004.

<sup>180</sup> シドニーの基本思想は、Scott A. Nelson, *The Discourses of Algernon Sidney*, Fairleigh Dickinson Univ. Press, 1993., 「人間は本来自由である」(31), 「自由とは人間が自然な状態にあることである」(32) となる。それは、人間は本来どこからも誰からも拘束されることのない自由の身にあることを意味する。シドニーの主張は、人間はアダム以来ある血統が他方に対して優位に↗

るが、墮落や公的背信と対極の位置にある「徳」については国の命運を左右するとして重視する<sup>(17)</sup>。栄華を誇っていた古代ローマが腐敗する歴史は彼らには徳の喪失によると写り、この点でシドニーはゴスリツキと結びつ

---

ゝあるとするフィルマーと明らかに対立する。しかし、「人間の自然状態」は人工的なものではないから無期限に続くにしても、人間の独居生活は、孤独、野蛮行為、弱さ、欠乏、悲惨さ、危険などに耐えられなくなり(33.)、自由であることは理性によって改善されない限り、自己破壊的であることにとなる(34)。

それを解決する唯一可能な方法は、「自由な状態」から離れ、人民が「共通の合意」により社会に参加することである(52, 56.)。社会への参加は、人間の本性の法則である理性に由来するのであり(36.)、それには余程の愚者でない限りすべてが参加する筈である。社会の目的は人民に正義と安全を与えるところにあり(53)、協定の当事者は人民自身である(56)。「契約の形と内容は、全人類に所与の一般規則に則り為されるべきである。もしも偽りの一般規則がなされると、我々はそれを検証しなければならない、それがなければ単なる虚構でしかなく結論はでない。我々は、国民と国王との協定はそうした国民の総意にもとづいて作成されてきたことを確信する」(58)。契約はそうに結ばれるので、支配者は契約義務に関しては厳正なる注意をもってそれに服さなければならないのである(57-58.)。

契約の中で人民の権利の種類、範囲が曖昧である時は、実際シドニーには政府の種類も含めてそれがあるが、そうした問題で裁判官となるのは「常識と自然な考え」ということになるが、Discourses を精読した者には、最終的な正当性の判断が人民主権であることに異論はない(59)。

(17) 平等に関してシドニーは、「すべての人は何事についても平等な権利を有する」と考えており、彼の平等に関する認識はこの概念とともにある(38)。しかしシドニーは、平等を否定するフィルマーへの反論に傾注しており平等の理論を真正面から構築するものではないため不備は否めない。

ところで、人間は誰もが自由への愛着を含む情念を有しており、これを抑えることは困難である一方、その放置は社会の複雑化とともに最後は耐えられない潜在的な脅威となる。しかしこれを救うのは、「人間の本性の法則」または「天の声」である理性であり(36)、その理性の命ずるものが「徳」である(37)。徳の目標は人類の善にある。

シドニーは「徳」を大きく3種類に分ける。(1)自製の徳であり、これは放蕩の墮落と対極する。(2)武勇の徳であり、柔弱や弱々しさの墮落と対極する。(3)誠実の徳は、信頼を裏切る墮落と対極する。Alan C. Houston, *Algernon Sidney and the Republican Heritage in England and America*, Princeton Univ. Press, 1991, pp. 147-178.

く<sup>①⑦</sup>。シドニーは、プラトンからアリストテレスまで読み二つの教訓を得る。それは、(1)専制君主制を正当化する唯一のものは超越的徳の君主だけである、(2)普通の人間或いは徳の薄い人間に専制君主権を与えると暴政が生ずるというものである<sup>①⑧</sup>。タキトゥス (Tacitus) の、人間一人による統治は公益にならないとの教えに従い、シドニーは「権力の分立」の必要性を認識する。徳そのものの脆弱性、権力集中の不信があるからである。シドニーは社会契約の目的を、人民に正義と安全を与えることであるとする。人民主権原理を支持するかれは、契約の正当性の最終的な判断は人民にあるとする。しかし彼の政治理論は、民主主義的な制度をとおして国民の声を直接に継続して政府に反映させることを重視するもので、革命は正当な政治秩序の方針ではなく、それは政治の失敗であるとする<sup>①⑨</sup>。

シドニーが過激なホイッグの中にあって近代的な共和主義を擁護するのは、スピノザの影響を受けているからであり、彼はイギリスの旧来の混合君主制を時代遅れの遺物として批判し、それに代わるものとして頻繁に実施される選挙、代表の入れ替り制、より平等で多数の代表者で構成される立法府の優位を基礎にする民主化された議会制度をもって君主制の再編成を望んでいる。

ロックは、人間には自然権としての生命、自由、資産などの固有権 (property) があり、自然状態においては個人の固有権を守るには多くのものが欠けているので、それを相互的に保全するのが社会の目的である、とする。これが彼の信託論であるが、信託の履行懈怠に陥った君主や立法部が、人民の固有権を脅かしたり、破壊しようとするとき、人民を恣意的な権力に服する隷属状態へと追いやろうとするとき、人民はそれ以上の服従

<sup>①⑦</sup> Goslicki, op. cit., p. 71; Houston, ibid., pp. 158-9.

<sup>①⑧</sup> Houston, op. cit., p. 154.

<sup>①⑨</sup> Ibid., p. 208ff.

から解放されて戦争状態に進んでもよいとする<sup>179)</sup>。こうしてロックは、すべての政治権力は個人の自然権からうまれ政府に信託されるが、政府崩壊のときは元の持ち主に戻るという政治的個人主義の立場にあり、その個人主義を基礎とするリベラルな立憲主義を支持する。

イギリス・アメリカの政治思想をみるとスコットランドの影響を忘れてはならない。スコットランド啓蒙運動の中心、ホイッグ派の F. ハチソン (Hutcheson, 1694-1746) の著書「美と徳の概念の起源探訪」(1725)にある「不可侵の権利」は抑圧的な政府に抵抗する諸権利とむすびつくものであるが、同書は1730年代初めにハーバード大で教科書に、1761年にはマサチューセッツの選挙説教に指定されている。「道徳哲学入門」は1760年代にフィラデルフィア大学の教科書として使われている。そこでは君主が人民の授与する範囲をこえて権力を行使し社会の幸福と安寧に被害を及ぼす場合はその体制に代わる政府の樹立を合法とする(後述)。T. ジェファーソンは入学した大学でハチソンの弟子スモールの「自由」と「徳」を説く講義に接して「生涯の運命を決定付けられた」と述懐する。ハチソンの影響力は評価されている以上のものがあったと考えられる<sup>180)</sup>。功利主義の代表者、国富論の著者アダム・スミスはハチソンの講義を受けて成長

---

179) ジョン・ロック「統治二論」(加藤 節訳)、岩波文庫、2010年。第5章、第9章、第19章参照。

180) ロビンスはハチソンの強い影響を主張し、ロックは多くの共和主義思想家の一人に過ぎないとする。Caroline Robbins, *The Eighteenth century Commonwealthman*, Harvard Univ. Press, 1959.

ハチソンの主著には次のがある。An Enquiry into Beauty and Virtue, 1725, Online Library of Liberty, (2007); A Short Introduction to Moral Philosophy, 1742, Online Library of Liberty (2007). ハチソンの道徳哲学は倫理とは異なり、人間の墮落、深慮、権利、政府の態様などを主要テーマにし政治分野にまでわたる。彼はプーフENDORFに負うところがある。ジェファーソンとスモールについては、A. McReynolds, *Legacy, The Scots Irish in America*, Ambassador International, 2009, p. 39.



するが、ジェファーソンは「政府はそこで生活する人間の幸福を増進する度合いに応じて評価されるべき」とのスミスの主張に感銘を受けている<sup>⑧⑨</sup>。スコットランドの啓蒙主義の影響を度外視することはできないであろう。

以上のように彼らは同じホイッグ派にいらながらもその結論は大きく異なる。ティレルは議会主権を重視し、同じく人民主権を主張しながらも自由を大切にするシドニーは人民の声を、ロックは固有権を重視するのである。ハチソンは、個人ひいては社会の幸福と安寧を重視するのである。

**アメリカ独立宣言（1776）** 植民地アメリカでの青年教育は古代ギリシャやローマの法律を解説する歴史家、哲学者の書物をラテン語、ギリシャ語で或いは翻訳を通して学ぶものであり、彼らは後に独立宣言、合衆国憲法などの起草に参加するにいたるが、「政府は『人民が主権者』である」と一様に考えている<sup>⑨⑩</sup>。植民地で人気があったのは、独立を志向するホイッグ急進派思想、イギリスでの課税反対運動リーダーの J. ハンプデンと、証拠不十分のなか国王暗殺の謀議加担で処刑された殉教者、共和主義思想の著書としての A. シドニーである。シドニーの「統治論」はまた、J. ロックの「統治二論」とともに教養ある人々に君主主義に幻滅をいだかせ、共和主義人気を沸騰させるのに役立っており、これらは広く読まれ議論の材料をも提供するなどして二人は互角の人気を誇っていたといわれる<sup>⑨⑪</sup>。

⑧⑨ Alf J. Mapp, Jr., *Thomas Jefferson: A Strange Case of Mistaken Identity*, 1987, p. 63.

⑧⑩ James McClellan, *Liberty, Order and Justice — A Introduction to the Constitutional Principles of American government*, 3<sup>rd</sup> ed, 2000, pp. 15-18.

⑧⑪ アメリカにおいてロック「統治二論」は早くから知られていた。一方、1698年出版のシドニーの *Discourse* は、ジェファーソンが、アリストテレス、キケロ、ロックと並ぶ最も重要な作品と考え（McClellan, p. 8.）、「従来の出版の

植民地アメリカは18世紀後半、「代表なければ課税なし」原則を主張し戦争に突入しついに独立するが、アメリカの動静に関心のあったポーランド最後の国王スタニスワフ2世は、「代表」と「課税」の分離は最終的には暴政が独立になると予見していた<sup>183)</sup>。アメリカ独立宣言および関連の文書には新しい政治哲学の原理が含まれており、それがポーランド、フランスをはじめ世界に刺激を与えてきたのは周知のところであり<sup>184)</sup>、フランス人権宣言はアメリカの影響を非常に強く受けて作られている<sup>185)</sup>。

これまで、植民地アメリカの独立に多大の影響を与えたという「ロック

---

183) 中で自然権に基づき統治原則を明かす最高の基本書」と絶賛する (Houston, p. 8.)。アダムスも注意深く読んでいる (ibid., p. 227)。共和主義派の2人はこうして互角の人氣があったのである (McClellan, p. 45.)。

184) ポーランド最後の国王、スタニスワフ2世アウグスト (位1764-95) は青年時代の1750年英外交官ウィリアムズ (C. H. Williams) の知遇を得て秘書となり、54年のイギリス旅行で見聞を広め人脈をつくり、ロシア (1755-59) に一緒に滞在する。彼は、ウィリアムズのホイッグ思想に違和感がなく、国際政治でのスタニスワフへの影響は相当あるとされる。国王時代のスタニスワフは、植民地アメリカの独立運動に関する情報に常時接しており、印紙法から始まる植民地側の「代表なければ課税なし」原則については当然至極と考える。スタニスワフは、1767年 Charles Lee 宛の手紙で、「植民地アメリカの代表と課税は一緒にあるべきものである。親子の関係は不可分とし、代表なければ課税なし原則に理解を示している。Richard Butterwick, Poland's Last King and English Culture —Stanisław August Poniatowski 1732-1798—, Oxford Univ. Press, 1998, p. 140.

185) それは憲法思想と人権について顕著である。Kenneth W. Thomson and Rett R. Ludwikowski (ed.), Constitutionalism and Human Rights: America, Poland, and France, University Press of America, 1991.

186) 自由貴族ラファイエットは、フランス公使の T. ジェファーソンから手渡された「ジョージア権利章典」を基にして「フランス人権宣言」を起草している。ALF J. Mapp, Jr. France and The United States: Historical Connections, in Thompson and Ludwikowski, ibid., p. 74. 人権宣言起草の様子については、Ian McLean, Thomas Jefferson, John Adams, and the declaration des Droit de l'Hommes et du Citoyen, Nuffield College-Oxford, 2002-W24, Working Papers in Politics. 参照。

神話」に近年懷疑論がささやかれ、検証された結果、シドニーの影響力があらためて見直されるにいたった<sup>(99)</sup>。シドニーの優勢は、1776年独立時に採択された第一波の多くの憲法に強い立法府をもつという過激なホイッグ的制度を採用するところに現れている。そうした立法府への権力の偏重を修正し行政府の強化をはかる第二波の憲法制定<sup>(100)</sup>では、モンテスキュー、ロックのいう三権分立への調整がなされている。そのように独立期にはシドニーの影響がおおきく、その後はリベラル派のロックから影響を受けたことがわかる

独立宣言は、「自明の真理」として人間の平等性、造物主からの「不可侵の権利」の賦与を謳い、その権利には生命、自由および「幸福追求の権利」があるとする。そうした理想実現のために政府が組織されるのであるが、この政府が、「これらの目的を毀損するものとなった場合には、人民は

---

(99) イギリス・アメリカにおけるロックの「リベラリズム」を解明しようと1950年代後半から60年代に一群の共和主義派の研究が相ついで登場した。新ロック派からも反論が寄せられた。こうして出された結論は、共和主義派に共通するのは、ロックのリベラル思想は考えられるほどイギリス・アメリカ伝統に創造的影響を及ぼしていないとする点である。さらにリベラル派と共和主義派の双方は、「ロックは完全にモダンであり、それゆえにリベラルである」とする点で一致する。こうして共和主義側のポーコックとウッドは、イギリスとアメリカのホイッグ派が統治の基本を学んだのはロックの近代的な自然権理論ではなくて、ローマやギリシャの古典からである、と言う。Ward, op. cit., Chapter: Introduction.

(100) ペンシルベニア憲法(1776)は一院制の立法府、広範囲な代表による毎年の選挙、対照的に弱い行政府と司法府であった。ヴァージニア(1777)は「独裁主義の選出」といわれるほど立法府に偏重された。そうした立法府への権力の偏重を修正してくるのが第二波の憲法制定であり、ニューヨーク(1777)は住民直接選出の行政府(3年間)、条件付の立法拒否権(検討理事会と共同で)、マサチューセッツ(1780)は住民直接選出の立法府(1年間)、3分の2の同意による立法拒否権などにみられるように行政府の強化が図られている。Ward, ibid., pp. 414-8.

それを改廃し、かれらの安全と幸福とをもたらすべしとみとめられる主義を基礎とし、また権限の機構をもつ、新たな政府を組織する権利を有する」のである。その理由はこうである。

「いかなる政治の形態といえども、もしこれらの目的を毀損するものとなった場合には、人民はそれを改廃し、かれらの安全と幸福とをもたらすと認められる主義を基礎とし、また権限の機構をもつ、新たな政府を組織する権利を有する……。」「連続せる暴虐と篡奪の事実が明らかに一貫した目的のもとに、人民を絶対的暴政のもとに圧倒せんと企図を表示するにいたるとき、そのような政府を廃棄し、自らの将来の保安のために、新たな保障の組織を創設することは、かれらの権利であり、また義務である。」<sup>⑧</sup>

独立宣言に影響をあたえた人物がだれかについては諸説あるが、ここではそれに踏み込まない。まず独立宣言へのロックの影響が云々されるが、もしジェファースンが「幸福の追求」の代わりに彼の核心的概念である『固有権』の追求」とすれば説得力もあるがそうでない以上、それには首肯できない。植民地では前述のように、ハチソンの思想が大学生をとおして広められ、選挙の説教演説にも使われるなどして社会への浸透度はかなりのものがあったと考えられる。またヴァージニア権利宣言にある「最大限の幸福と安寧をもたらし」は功利主義的倫理の格言の一部であるが、これは独立宣言では「生命、自由および幸福追求の権利」として引き継がれている。革命による「最大多数の最大幸福」を標榜する功利主義の代表者ハチソンは影響力ある忘れられない存在である。

つぎに政府が存在目的を毀損した場合、革命による政府の改廃と新設についてであるが、これはロックに特有のものではない。シドニーもロック

---

⑧ 「アメリカ独立宣言」(斉藤 真訳),「人権宣言集」,岩波文庫。

と同じように主張する<sup>(89)</sup>。これについてハチソンは丁寧に説明する。「主権を授かる者が有するのは、人民が基本法の範囲内で授ける主権とそれに関連の権利である。……国王あるいは何らかの評議会に授与される権限はその人物や評議会によって大きく異なるが、人民の権利の中には君主や政治評議会が行使するものから明らかに除外されるものがある。しかしまったく除外されていない場合には、人民のすべての権利は国王や評議会の叡智や誠実さ次第に依るのであり、市民の権利目的が全体の安寧と幸福に沿わないと人民自身が考える場合、目的に沿わないすべての権利は当然不当となり、人民は錯誤のもとで軽率に授けたとして、自らの安寧に必要と判断すれば、その廃止は正当なものである。」「そうした権力の廃止は、支配者に対する暴力や内乱によるよりも合意という平和的方法で為されるのが望ましいが、社会の自由や安寧の確保が忍耐の限度を超えるものになり、更なる不幸が連続発生する場合には、人民は当然にそれを廃止できるのである。人民の為だけに権力を付与される人間でありながら、権力行使により人民に加害する場合でも、吾身に重要であるため武力を以てまでして権力に固守するほど傲慢無礼なことはない。」「人民はいかなる政府の権力の乱用に対しても武力をもって自らを防御する権利を有する。かりに君主が制限される権力の範囲をこえて人民の保留する権利そのものを侵害する場合には、人民の抵抗権は疑問の余地なく明らかである。」<sup>(90)</sup> このハチソンの政府交代論も社会に知られていたのである。

こうして独立宣言は「幸福の追求」にしても「政府の改廃、新設」にし

---

<sup>(89)</sup> Alan C Houston, op. cit. pp. 211-214.

<sup>(90)</sup> Francis Hutcheson, *Philosophiae moralis institutionum compendiosa cum a Short Introduction to Moral Philosophy*, 1747, edited and with an Introduction by Luigi Turco (Indianapolis: Liberty Fund, 2007). Chapter 7: The Rights of the Supreme Power and the Methods of Acquiring it.

でも従来知られてなかった人物の影響が相当にあるということになる。ここで以上の話を総括すると、独立時の植民地には上記のようなホイッグ派的思考はごく普通に存在していたということである。これはとても重要なことである。ジェファースンは独立宣言起草から約半世紀後、90歳弱の時かつての同僚への書簡にて宣言起草にまつわる心情を吐露するが、それは、独立宣言は新原理を述べるのではなく、「アメリカのホイッグならば誰もが同様に考える」内容であり、それゆえ「独立宣言の起草中、どのパンフレットも書物も参照していない」としてロック理論剽窃の噂を強く否定し、常日ごろの思想を「世界の法廷に訴えたい」がために激越な口調で表現したにすぎないとする<sup>⑩</sup>。納得のいく説明である。

今日、植民地での情報媒体に関する詳細な内容が明らかにされている。植民地全体で新聞社の発行する新聞は1775年までに38紙あり、無数に出されるパンフレットもあり、それらは政治的主張の賛否を展開する有力な情報媒体であった。マサチューセッツやコネチカットの教会は独立1世紀前からだす説教集にも政治的至言を載せている。それら媒体中で最も重要なのは16世紀初期から登場し17世紀、18世紀に活躍するパンフレット（四つ折版から八つ折版、10から50頁）であり、そこでは誰もが意見を主張し風刺し反論するのである。ヨーロッパの啓蒙主義もパンフレットで断片的に紹介されている。独立直前に出て圧倒的な人気を博したトマス・ペイン「コモン・センス」を別格とすると、他はそれほどではない。ロックについては、彼を専門とするオーティス（Otis）のような識者でさえ理論の粗筋は正確に紹介するが内容は表面的なものにすぎないのであり、それを人々

---

⑩ Thomas Jefferson to James Madison (August 30, 1823) and Henry Lee (May 8, 1825), Thomas Jefferson, *The Works of Thomas Jefferson*, Federal Edition (New York and London, G. P. Putnam's Sons, 1904-5), vol. 12. Chapter: To James Madison and To Henry Lee.

は自説を補強するため物知り顔に利用するからロックの引用が多いのである。これがロック人気の内実である。その一方、植民地の人々は17世紀の「自由の英雄」シドニーとわが身を同一視する傾向があり、人気はシドニーのほうが住民に浸透しているのが知られるのである<sup>⑩</sup>。こうしたありさまから、ジェファースンは後年ロックの影響を受けただろうが、宣言起草当時彼はロックを断片的にしか知らず、したがって独立宣言の思想がロックに由来すると捉えるのは行き過ぎなのである<sup>⑪</sup>。

ところで政府の改廃と新設の理由についてであるが、独立宣言に謳われる内容と前述のゴスリツキの論説をみくらべて頂きたい。ゴスリツキはいう。

「ときに人民は、国王の暴政と略奪に激怒して自らの自由を守るという明白な権利を行使する。こうして十分に謀議を凝らすか或いはまた公然と武器をとって、服従の束縛から脱却し、領主や支配者を追放し、ついに政府を完全に自分たちの掌中に収めるのである。」

独立宣言は宣明する。

「連続せる暴虐と篡奪の事実が明らかに一貫した目的のもとに、人民を絶対的暴政のもとに圧倒せんと企図を表示するにいたるとき、そのような政府を廃棄し、自らの将来の保安のために、新たな保障の組織を創設することは、かれらの権利であり、また義務である。」

両者を比べるとその内容とその表現のしかたには極めて高い類似性がみられると考えられる。これまで毀損するイギリスに代わってアメリカが政府を樹立するのはロック理論に依るとされているが、信託理論はロック誕

---

⑩ Bernard Bailyn, *The Ideological Origins of the American Revolution*, Enlarged edition, Harvard Univ. Press, 1992, pp. 1-10, 22-28, 34-5.; Alan C Houston, op. cit., pp. 246-254.

⑪ Alf J. Mapp, Jr., *France and the United States: Historical Connections*, op.cit., p. 70.

生の100年前にゴスリスキが既に公にしているのである。ゴスリスキの過激さ故に著書は焚書にされたが、その思想は神学者ベラミーノを通してシドニーに伝わり、ベラミーノからジェファーソンにも伝わっている<sup>198)</sup>。ジェファーソンがゴスリツキの著書を所持していたのは確認されていることから（後に議会図書館に寄贈）、この二つの文書の表現のしかたに2世紀の時差を越えて高度の類似性があることから推してゴスリツキのジェファーソンへの影響はあるとするのが自然である<sup>199)</sup>。

またゴスリツキの標榜する「個人的幸福にこそ、共和国の一般的かつ社会全体の幸福がある」とする思想は、その系譜があるかどうかは不明であるが、ハチソンの「社会の幸福と安寧」を求める功利主義に相通ずるものがあると考えられるのである。

以上のように理解すると、これまで殆んど無名であったポーランドの一市民ゴスリツキが近代思想に大きな影響を及ぼすにいたる現実をここに知るのである。イギリスの17世紀ピューリタン革命では彼の片言隻句でホイッグ派の人々を鼓舞したが、つぎに18世紀アメリカ独立運動ではホイッグ派の革命を勝利に導いたのである。

---

<sup>198)</sup> M.J. Madaj, *The Meaning of the Bicentennial to the Polish American Community*, *Polish American Studies*, vol. 22, no. 1 (Spring 1976), pp. 53-59.

<sup>199)</sup> 影響ある。Jedruch, *op. cit.*, p. 105.; Pognowski, *The First Democracy in Modern Europe*, 2010, p. 45.; Carl L. Bucki, *The Constitution of May 3, 1791*.

《<http://info-poland.buffalo.edu/classroom/constitution.html>》；他方、直接引用の証拠がなく影響ない。Daniel H. Cole, "From Renaissance Poland to Poland's Renaissance", *Michigan Law Review*, vol. 97, 1999, p. 2075.



## 五. おわりに

ゴスリツキがイギリスで認識される1597年当時、エリザベス1世（位1558-1603）は英西戦争（1585-1604）の最中であり、その軍事的経済的負担を国民に押付けるが、大規模な戦争による辛苦は厳しい不作と疫病とでもたらされる経済的苦境と同時発生していたのである。

そのような鬱々とした空気の1590年代末、君主国イギリスに共和主義を薦める二つの著書が登場する。コンタリーニ（Contarini）の1599年英版“De magistratibus et reipblica Venetorum”と、ゴスリツキの1598年英版“The Counsellor”である。それら共和主義に関する論文は、貴族趣味の偏見ある人には馴染んだが、ゴスリツキの著書は学術書と誤解されていた<sup>99)</sup>。要するに人気がなかったのである。

エリザベス1世は、英艦隊がポーランド船を略奪していたこともあり、ポーランドが姻戚関係のスペインと同盟を結ぶのを警戒していた。その最中、1597年7月謁見に訪れたポーランド大使の言動に激怒したエリザベス女王は、ライオンが立ち上がるかのごとき姿勢になりラテン語で捲くし立てて非難し、自然法や万民法（*jus naturaie et gentium*）くらい知っていると返報した<sup>100)</sup>。女王がゴスリツキを知っているのではとの噂はここからたち、彼の評判がでたのである。時系列からしてエリザベス女王の読んだゴスリツキはラテン語版であり、誤訳の多い1598年英版は政府の肝いりでつくられたと噂される。なにはともあれ、ゴスリツキの名声は一気にヨー

---

<sup>99)</sup> Markku Pertonen, *Classical Humanism and Republicanism in English Political Thought, 1570-1640*, Cambridge Univ. Press, 1995, p. 119.

<sup>100)</sup> Norman Davies, *op. cit.*, p. 298.

ロッパに知れるが、特にイギリスで名声があるのは17世紀内乱時に彼のフレーズが反政府のホイッグ派の栄養源であったからである。

ホイッグ派思想が伝播した植民地ではロック、シドニー、ハチソンその他の思想が語られて遂に自前の政府をもとうと独立するのであるが、そこには彼らの思想に混じりゴスリツキのそれも投影されているのを筆者は知るのである。参照文献のないロック、逆に多くの参照文献をあげるシドニーだが典拠にゴスリツキが見えないのは焚書の故かとも思われたが、カトリックの司教ベラミーノの紹介で思想はシドニーに伝わっていることがわかり「徳」を重視する両者の姿勢に共通点をみるのである。ゴスリツキはまたジェファーソンにも伝わっており、独立宣言にはゴスリツキの思想も関与していることも知るのである。

エリザベス1世と同時代の哲学者ジョン・ディーはルネサンス期に活躍した人物としてゴスリツキを推奨するが（既述）、その書“*De Optimo Senatore*”は過激で危険な思想をまきちらすとしてエリザベス女王により焚書処分に付され、そのことで彼の命脈は絶たれたかにみえるが、人民の幸福を重視する思想は引き継がれていたものであり、イギリスのピューリタン革命にもアメリカの独立宣言にもその影響をみることができる。そのように現代の社会思想に大いなる影響を与えているのに接すると、ゴスリツキはポーランドの偉人の一人として評価するのが相応しいと筆者は思うのである。